

金 剛 峯 寺 遺 跡

— 南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査 —

1 9 9 0 年 3 月

財団法人 和歌山県文化財センター

金 剛 峯 寺 遺 跡

—— 南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査 ——

1 9 9 0 年 3 月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山県伊都郡高野山に所在する金剛峯寺は、弘仁7年（816）空海による開山以来、真言宗の総本山として内外に知られ古代から多数の人々の信仰をあつめました。平安時代以降は貴紳の参詣が盛んになり、山内には子院が多数創建され、今日に至るまでの繁栄の基礎が築かれました。近年では観光地としても脚光を浴び、多くの人々で賑わっております。

このたび山内の南都銀行高野山支店において新築工事が計画され、工事に先立ち当文化財センターが発掘調査を行いました。その結果、江戸時代から現在にいたるまでの井戸や池跡、溝など多数の遺構を検出し、中国製の磁器や備前焼、萩焼、唐津焼、伊万里焼などの国産陶磁器も多数出土しました。ここに調査の成果をとりまとめ、報告書として刊行いたします。本書が当地方の歴史を知るうえで一つの資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり数々の御協力をいただいた関係各位並びに調査事業の推進に絶大なる御援助を賜った地元関係者及び土地所有者の皆様には、深く感謝の意を表し厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志 良

例 言

- 1 本書は南都銀行高野山支店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査地点は和歌山県伊都郡高野町高野山783番地である。調査面積は467m²である。
- 3 調査に係る経費については南都銀行が負担した。
- 4 調査は和歌山県の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- 5 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員舘磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫（和歌山県文化財保護審議委員会委員）各氏の指導、助言を得た。
- 6 調査組織は以下の通りである。

和歌山県教育委員会

文化財課長	北野全美
文化財課副課長	堀代喜蔵
文化財課主幹	高橋 彬
文化財課文化技術班班長	吉田宣夫
文化財課文化技術班専門員	藤井保夫

財団法人和歌山県文化財センター

事務局長	鍋島伊津夫
事務局次長	菅原正明
埋蔵文化財課長	辻林 浩
埋蔵文化財課技師	黒石哲夫（担当者）
管理課長	松田正昭

- 7 本書の写真撮影および実測・トレース、執筆・編集は黒石が行った。
- 8 本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。遺物は原則として1/3で、大型品について1/4・1/5で収録した。1/4・1/5のものについては個々にスケールを付した。
- 9 挿図中の方位はすべて真北を表したものである。
- 10 本書で使用した遺構記号は下記のとおりである。

S B 建物	S E 井戸	S G 池
S D 溝	S K 土坑	S X その他
- 11 調査にあたっては、南都銀行高野山支店、高野町教育委員会、金剛峯寺、地元の方々から深い御理解と御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査経緯	2
第Ⅲ章 調 査	3
第1節 遺 構	3
第2節 遺 物	13
第Ⅳ章 ま と め	16

図 目 次

第1図 調査地位置図 S=1/25000
第2図 調査区周辺図 S=1/5000
第3図 調査区基本層序模式図
第4図 S E 101実測図
第5図 S X 101実測図
第6図 S E 1001実測図
第7図 上面遺構平面図
第8図 中面遺構平面図
第9図 下面遺構平面図
図1 表土・上面遺構出土遺物実測図
図2 上面遺構・中面包含層出土遺物実測図
図3 中面包含層出土遺物実測図
図4 中面包含層・中面遺構出土遺物実測図
図5 中面遺構・下面包含層出土遺物実測図
図6 下面包含層・下面遺構出土遺物実測図
図7 下面遺構出土遺物実測図
図8 下面包含層・下面遺構出土遺物実測図

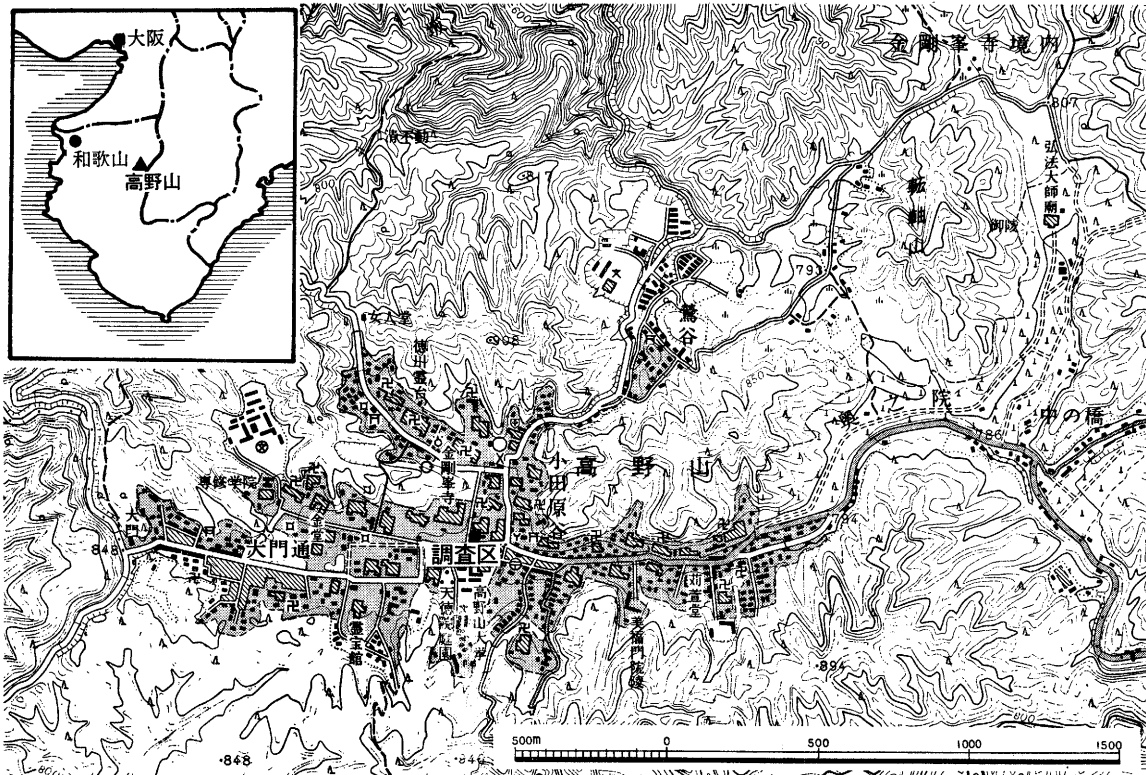
図版目次

図版1	1 上面遺構全景（南から）
	2 中面遺構全景（南から）
図版2	1 下面遺構全景（南から）
	2 S X 101（北から）
図版3	1 S E 1001（西から）
	2 S D 1001～1004（西から）
図版4	1 上面包含層遺物出土状況
	2 S X 02（北から）
	3 S D 101（南から）
	4 S G 102遺物出土状況
	5 S E 101（北から）
	6 S D 1002・1003継手部（北東から）
図版5	表土・上面遺構出土遺物
図版6	上面遺構・中面包含層出土遺物
図版7	中面包含層出土遺物
図版8	中面遺構出土遺物
図版9	中面遺構・下面包含層出土遺物
図版10	下面包含層・下面遺構出土遺物
図版11	下面遺構出土遺物
図版12	下面包含層・下面遺構出土遺物

第Ⅰ章 位置と環境

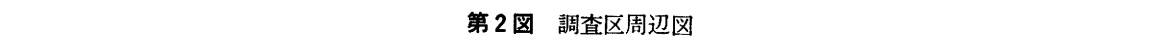
高野山は紀の川上流左岸から南に続く山岳部にあり、周囲を内外両八葉といわれる1000m前後の峰々に囲まれた山上盆地である。東西約5kmの盆地の両端に奥院と大門があり、その中間の南北に延びる谷々に多数の僧房が営まれている。奥院の裏には摩尼・楊柳・転軸のいわゆる高野三山がそびえ、この間から玉川が流れる。高野山の年間平均気温は約11℃で和歌山市などより6℃程低く、夏期には避暑の観光客や林間学校の生徒達で賑わうが、冬期には積雪がみられ人影はまばらで、春や秋には山内は深い霧にしばしばつまれる。

高野山金剛峯寺の開創は空海が嵯峨天皇から同地を賜った弘仁7年(816)から開始された。空海は修禪の寺を建立するために、実恵・円明を派遣して伽藍建設に着手し、弘仁9年11月に登山して自ら工事の指揮にあたった。伽藍配置は南北の中心線上に金堂・中門を、その後方東西に、大塔・西塔を配し胎藏・金剛両界に擬するという独特の構想によるものだったが、工事は遅々として進まず、空海が入滅した承和2年(835)には、まだ未完成であった。その後、造営事業は弟子の真然や実恵に引き継がれ、9世紀後半によりやく一応の完成をみた。金剛峯寺は承和8年(841)定額諸寺に準じて灯分が施入されて、官寺に準じる待遇を受けるようになり、貞観18年(876)には紀伊国内に散在する寺田38町の不輸租が認められて、ようやく経営も軌道に乗ったが、9世紀末には空海とゆかりの深い東寺や高尾山寺との間で抗争が始まり、延喜16年(916)には金剛峯寺は東寺の末寺となり、衰退していき、正暦5年(994)の落雷による大火で御影堂を除く伽藍諸堂がことごとく焼失した。しかしながら、11世紀になると復興の機運が高まり、定誉などの聖が勧進僧として復興事業に尽力し、治安3年(1023)には藤原道長が登山



第1図 調査地位置図

試掘調査の結果から調査地区には近世初頭から近現代に至るまでに少なくとも 3 面の遺構面が存在し

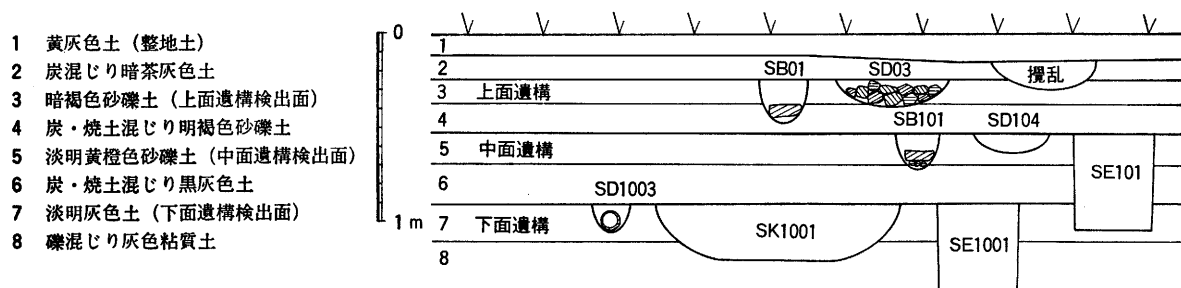


第Ⅲ章 調 査

第1節 遺 構

1 基本層序

調査地点は山内中央部の金剛峯寺と道1つ隔てた東隣りに位置し、東側と北側を蓮花院に囲まれた標高約816.8mの平坦地で、若干北から南へと緩やかに傾斜している。調査地区の土層は基本的に8層に分かれる。上から順に、第1層は銀行の造成に伴う黄灰色の整地土で拳大から人頭大の石が多く含まれていた。第2層は上面遺構包含層の炭混じり暗茶灰色土、第3層は上面遺構のベースとなる暗褐色砂礫土、第4層は中面遺構包含層の炭・焼土混じり明褐色砂礫土、第5層は中面遺構のベースとなる淡明黄橙色砂礫土である。第6層は下面包含層の炭・焼土混じり黒灰色土で、第7層は下面遺構のベースである淡明灰色土、第8層は礫混じり灰色粘質土である。第2層・4層・6層の炭・焼土層は北側ほど顕著で厚く堆積していた。各遺構の時期は上面遺構は銀行建物の基礎工事や排水溝などでかなり破壊されていたが出土遺物から近世末から明治時代後半頃の遺構だと思われる。中面遺構は17世紀中頃前後で、下面遺構は17世紀初頭頃の年代だと考えられる。第8層以下は青灰色の粘質土層をしており杭や瓦器、土師器の破片が少量出土しており、中世以前には当地は沼状の湿地でなかったかと思われる。



第3図 調査区基本層序模式図

2 上面遺構（図版1—1）

建物（SB01） 東西5間の礎石をもつ建物跡で、南側の半間の庇と考えられる部分を検出した。調査区の北側に続いているようである。

溝（SD01・02・07） 竹の節を剥抜いて導水管とし、「駒」と呼ばれる木製の継手で管をジョイントした上水道施設である。SD01・02は竹は腐食していたが駒は遺存していた。

溝（SD03） 幅約0.7m・深さ0.3mのU字型の溝に拳大の石を入れた暗渠溝と思われる。

溝（SD05） 幅約0.7m・深さ0.3mのコの字状の掘方に人頭大の砂岩を内側を平坦に揃えて据え付けた石組み溝である。

溝（SD07） 幅約0.5m・深さ0.2mの掘方の肩部に板を杭で固定した木組みの溝である。

土坑（SK06・08） 一辺約1.2m・深さ0.3～0.5m程の方形の土坑で壁や底の一部が熱を受けて赤変しており、底には炭が薄く堆積していた。

石敷炉（SX01・02） 扁平な20cm程の石を上を平坦にして並べており、SX02では周囲の一部をやや大きな石で囲んでいた。石敷の上には炭と焼土が10cm程堆積していて多数の陶磁器が出土した。

3 中面遺構（図版1－2）

建物（S B101） 南北7間で約40尺（12.0m）を計る大型の建物である。西端のみを確認しただけで全体の規模は不明である。主軸の方位はほぼ磁北方向である。柱穴は直径約50cm、深さ40cm程の掘方に拳大の根石を敷きその上に30cm程の石を据えていた。

建物（S B102） 東西南北2間×2間の礎石をもつ小さな建物である。南北の柱間は約1.3m、東西の柱間は約2.0mである。方位はほぼ磁北方向にそっている。

溝（S D101） 調査区の東側を南北に延びる溝で、幅約0.7m深さ0.4mを計る。長さ1m～4m程の木の幹を杭で両側に固定して、その上に10cm～20cm大の石を平積みになっていたようである。伊万里や美濃瀬戸、中国製の染付け類が多数出土した。

溝（S D102・106） 幅約0.4m～0.7m、深さ約0.2mで、溝の両側には板が杭で固定され、その上には板で蓋をされていた。

溝（S D105） 東西に延びる竹製の導水管で、継手を3ヶ所で確認した。

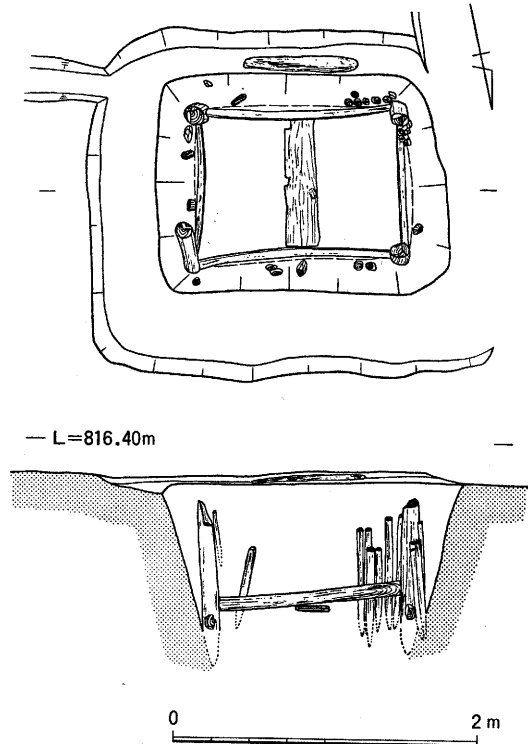
井戸（S E101） 平面長方形で 東西辺2.0m、南北辺1.5m、深さ1.0mの小型の木組み井戸。四隅に丸太を据えて下部を丸太を半截した部材を梁にして組んでいた。上部も丸太のはぞ穴の形状から同様に梁が通され、全体としては直方体の木枠が組まれて、板材が横にわたされ杭で固定されていたと考えられる。底板が一枚だけ中央に残され他の部材は抜き取られていた。

池（S G101） 調査区の北東で一部を確認したのみで、形や規模は不明である。木製の椀が3点出土した。

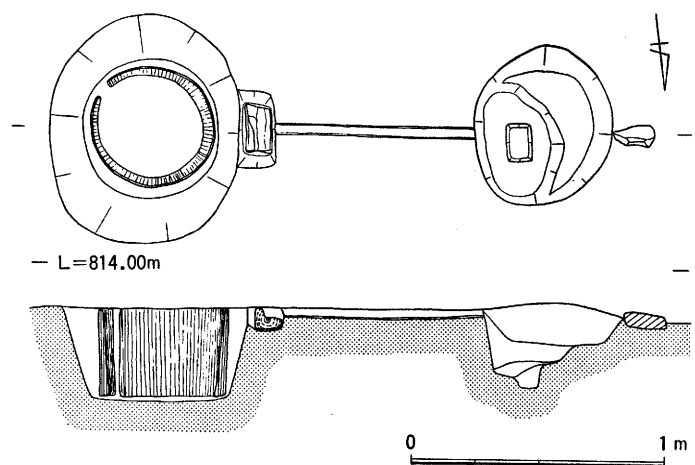
池（S G102） 一部を確認したのみで全容は不明である。木製の椀や一石五輪塔が出土した。

水道施設（S X101） 内面を刳抜いて焼いた直径約50cm、高さ35cmの円筒状の高野槨を楕円形の掘方に埋め込み、西側からは竹製導水管を通して駒で継いでいる。水圧で駒から上に水を流し高野槨を水槽としたものであろう。

門（S X102） 柱間がほぼ一間（1.8m）で柱穴の間には板が敷居として埋められていた。門跡だと思われる。



第4図 SE101実測図



第5図 SX101実測図

4 下面遺構（図版2-1）

溝（SD1001・1002・1003・1004）

調査区南側を東西に延びる、竹製導水管を埋設した遺構である。SD1001は途中でY字形に分岐しているが、枝分かれした2本の導水管が同時に機能していたのか、あるいは導水管が壊れたために付替えたのかは断定し難いが、溝のレベルが東側が西側より数cm高く水が東から西に流れていたと思われる点と駒との取り付け方が直線的でなく2本とも斜めに付いている点を考慮すると、当初から分岐して分水されていた可能性が高い。SD1003は途中2ヶ所でL字状に屈曲している。屈曲部では駒あるいは枕と呼ばれる長さ30cm、幅15cm程の用材の平部を直角に刳抜いて縦に据えて継手としている。1ヶ所では水圧で駒が竹筒からはずれないように空の駒を補強部材として北側にくっつけて埋設している。この補強の仕方から屈曲部では南から北へ、全体としては東から西へと送水されていたと思われる。

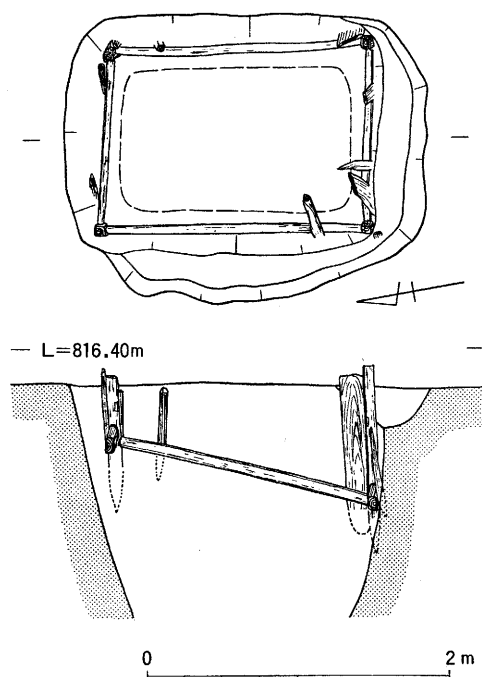
井戸（SE1001）と溝（SD1005・1006）

SE1001は平面が隅円長方形をしめし、南北辺2.2m東西辺1.6mの木組み井戸である。四隅に幅15cm程の角材を固定して底部・中部・上部の3ヶ所で横に梁を通して組み合わせて、その外側に板材を縦にめぐらして井戸枠としていたようである。部材は大半が抜き取られて底部などしか残っていなかった。井戸の掘方から数10cm離れた南西・南東・北東隅に30cm程の扁平な石が据えられており井戸の上屋を支えた礎石だと考えられる。埋土からは備前焼の大甕や水屋甕の破片が出土しSK1001の出土遺物と同一個体であった。

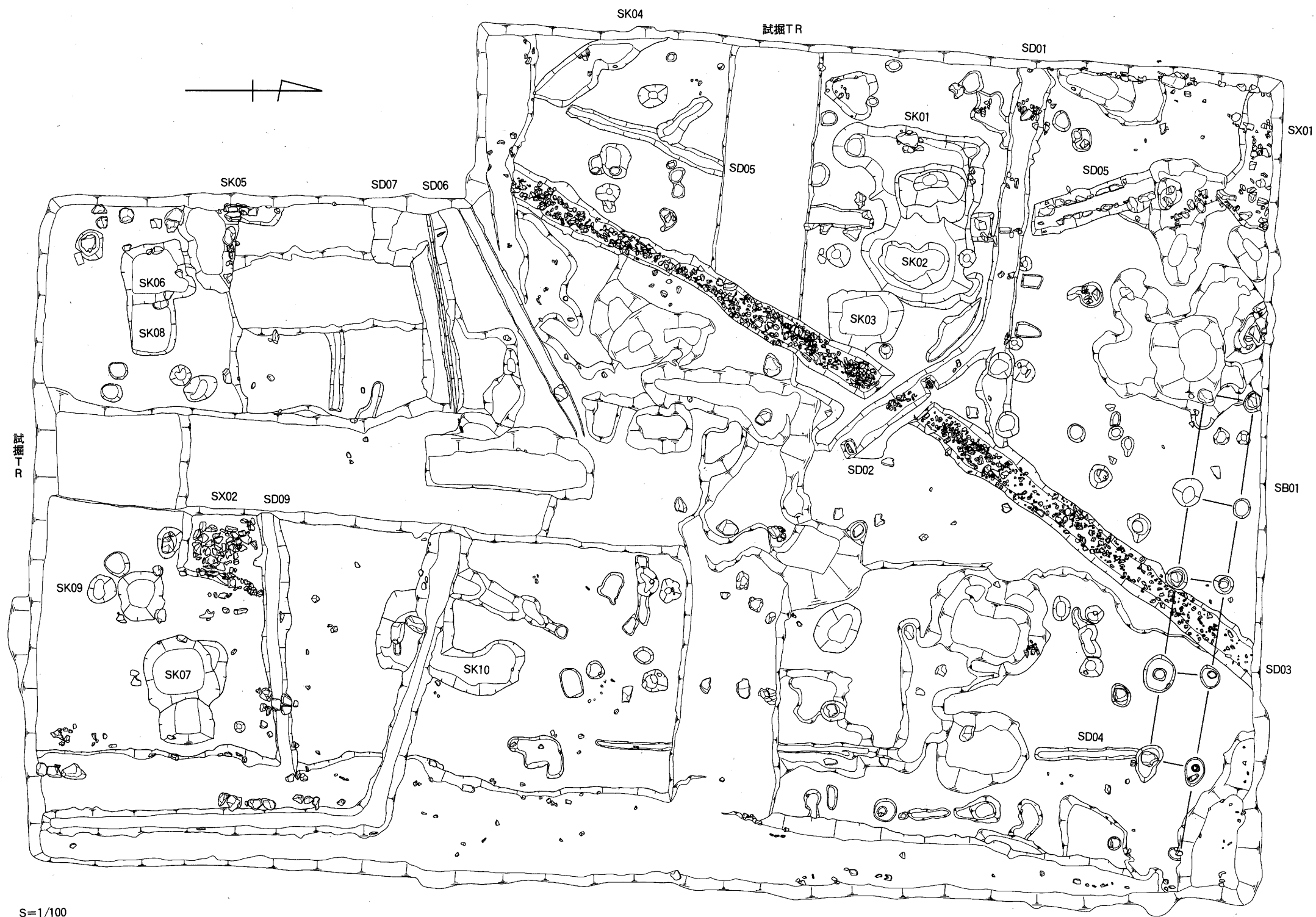
SD1006はSE1001の南側を1m程離れて東に延びる竹製導水管埋設遺構である。西端の土坑には底に板石が敷かれその上に上面と長側面に穴が穿孔された駒が設置されており、上からの水圧の荷重に耐えられるような構造をしている。おそらくこの上に竹筒でジョイントされた水槽などの施設があり、井戸の水を汲み上げてそこに流し込み、水圧を利用してSD1006で西へと送水していたようである。SD1005も本来はSD1006と駒で連結されて井戸の水を南へと送っていたと思われる。

土坑（SK1001） 東西5.5m、南北6.5m 深さ約0.7mを計るハート形の巨大な土坑である。当初は池跡ではないかと考えたが護岸施設や連結する溝がないことから土坑と判断した。上層から中層までは炭や焼土混じりの黒褐色砂礫土が堆積しており、備前・唐津・丹波などの国産陶器や土師器、中国製の青磁・白磁・染付が多数出土した。下層は淡青灰色の粘質土で石臼・茶臼・一石五輪塔などの石造物が北西隅からまよって出土した。

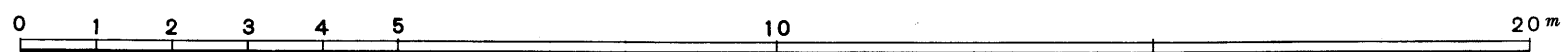
土坑（SK1002） 東西2.6m、南北2.7m、深さ0.5mを計る隅円三角形の土坑である。埋土は茶褐色の砂礫土である。鹿や猪を描いた染付の稜花皿が出土した。



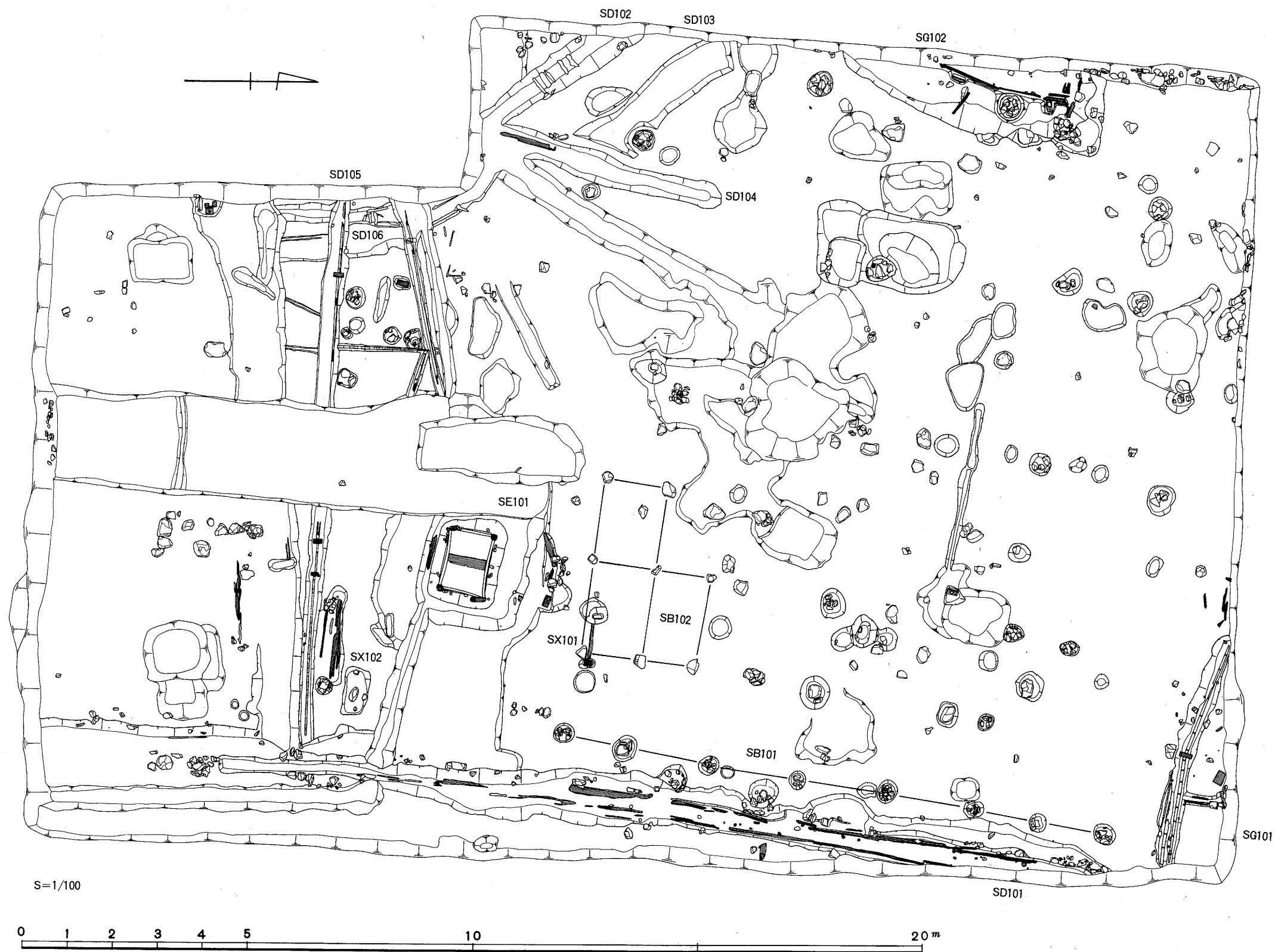
第6図 SE1001実測図



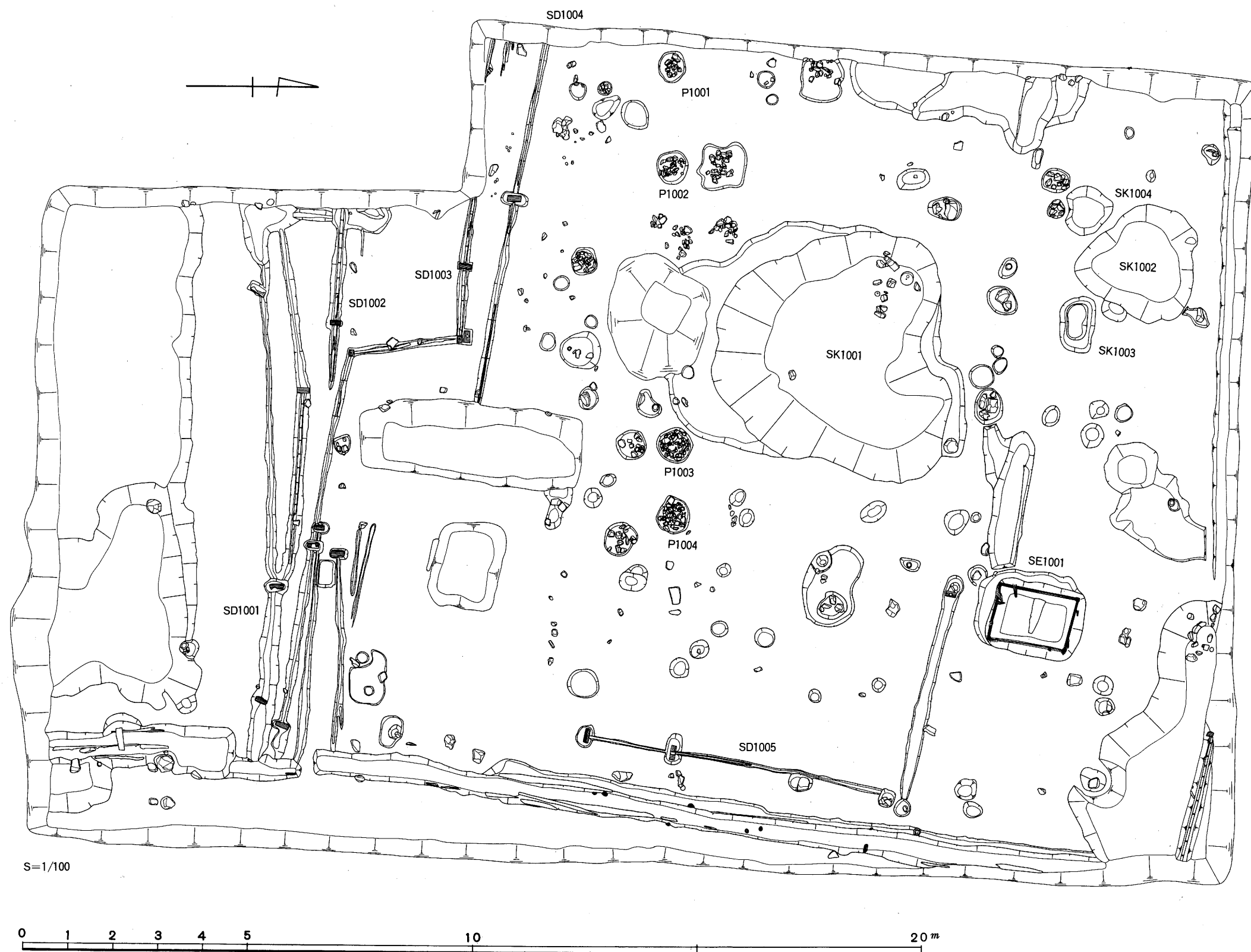
S=1/100



第7図 上面遺構平面図



第8図 中面遺構平面図



第9図 下面遺構平面図

第2節 遺 物

表土・攪乱（1～12）

1は伊万里染付の仏飯器。2も伊万里染付の小碗で、口縁はやや端反り気味である。3は肥前系の大型碗。口径14.2cmで淡黄灰色の飴釉が内外面にかかる。4は萩焼で深川産と思われる碗。体部の釉は乳灰黄色で口縁部は灰オリーブ色である。高台部は非常にシャープに削り出されている。5は肥前系の灯明皿で内面には4条の沈線と菊状の貼り付け文があり、3ヶ所に針目がみられる。6と12は産地不明の染付碗で淡明白色の胎土をしている。7・8・10は中国製で、7は口縁端反りの白磁皿、8は染付の小盃、10は染付の碗で外面には漢詩が書かれており、ガラスで焼継した痕跡がある。9は土師皿で底部は回転糸切りである。11は伊万里染付の小碗。

SD01・04（13・14～16）

13は伊万里染付皿で内面には牡丹が描かれている。14は伊万里の碗で「壽」の丸文と異体字が見込みと外面に描かれている。15は行平鍋で淡黄緑色の釉がかかる。16は灰釉の香炉で肩部に耳が付く。

SK01・07・08（17～18・19～23・24）

17は把手付き鍋で底部に短脚が3ヶ所に付く。「大」という朱印が外面底部近くに押されている。18は口径30.6cmを計る焙烙で、口縁部に2穴穿孔された耳が2ヶ所に付き体部にも2穴穿孔されている。19は美濃瀬戸系の大型の天目茶碗で、黒褐色釉の上に茶灰色の釉がかけられていて表面は銀灰色の光沢をもつ。20～23は京焼系の灯明皿である。23は肥前系の灰釉の蓋である。24は唐津の瓶で口縁部から頸部に鉄釉がかかり、肩部は灰オリーブ釉の上に淡灰黄色釉が刷毛塗りされている。底部はいわゆる碁筭底に近い形状をなす。

SX01・02（25～33・34～38）

25・26は肥前系の灯明皿で内面に4条ないし5条の沈線が刻まれ針目が3ヶ所にみられる。口縁部には煤の付着が見られる。27は瀬戸の染付小盃で透明度の高い明白色の胎土である。28は伊万里の広東形碗で胎土は淡灰色で内面に五弁花文がみられる。29は産地不明の大型の染付碗である。30～32は伊万里の染付碗で、30は外面に菊花文が描かれた小型筒形碗。31は外面と内面見込みに梅樹文が描かれた小型丸形碗。33は肥前系の丸形碗で内外面に淡灰色の釉がかかる。34は伊万里のそば猪口で外面には簡略化された雨降り文が描かれる。35は伊万里の染付小碗。36は青磁の香炉で、口縁端部を内側に折り曲げて丸く仕上げ、体部外面と内面上端に鈍い青灰色の釉がかかる。高台部と内面には鉄錆が塗られ暗褐色を呈する。37は肥前系の灯明皿で外面には判読不能の7文字が墨書されている。38は長方形の小型の硯。

中面包含層（39～67）

39は志野の盤で内面に蕨手文が陽刻され、内外面に乳灰色の釉がかかる。40・41は肥前系の灯明皿。41には重ね焼の痕跡が外面にかすかにのこる。42は灰釉の蓋で淡黄灰色の釉が外面にかかり、内面には「イ」と墨書きされている。43・44は伊万里仏飯器。45は伊万里のキセルの金口。46は伊万里の盃。47・49～51は伊万里の碗で、50はくらわんか碗と呼ばれるものだが胎土は灰色で他の伊万里とは色調が異なる。51は仙芝祝寿文が描かれた小碗。48は白磁の稜花皿で型押し成型で造られたと思われ、内面には竹が描かれる。52は産地不明の染付碗だが胎土は透明度の高い白色で美濃瀬戸系かもしれない。53～59は^①従来、清水焼と呼ばれていた京焼風の碗であるが、鍋島藩で焼かれた肥前系陶器と考えられる。いずれ

も外面底部に刻印がみられ、53・59が「清水」、54が「上政」、55・57・58が判読不能の篆書体、56が「森」である。内面見込みには三重塔が素描され、高台部は露胎である。釉は53・54・56・59が艶のある乳白色で、57・58が明黄灰色、55が暗黄灰色である。60も京焼風の肥前系陶器である。61は口縁がやや端反る中国製の染付皿で内面には虫と白菜のような草花文が描かれている。包含層とSD101から5個体以上出土しており、高台はいわゆる蛇の目高台で畳付部の幅は5mm～15mmと幅広く、高さも2mm～5mmと低い。高台側面には細かい砂粒が付着している。胎土が淡灰色のため全体的にやや青味を帯びている。62は焼塩壺の蓋。直径7.2cmで色調は暗褐色。63は焼塩壺で外面には二重杵線をもつ「天下一堺ミなと藤左衛門」の刻印があり、輪積み技法で作られ内面には布目が認められる。17世紀第3四半期頃の年代が想定されている^⑨。64は伊万里の青磁香炉で淡灰色の釉が外面と内面口頸部にかかり肩部の2ヶ所に菊花文が貼り付けられる。65は小型の摺り鉢。内面に8本単位の細かい摺り目がびっしりと刻まれている。66は美濃瀬戸の天目茶碗。淡黄灰色のやや粗い胎土に褐釉がかかる。67は萩焼の碗。高台はシャープな削り出しで、腰部の屈曲はゆるやかである。

SD101・108 (68～75・76)

68は土師質で厚手の小るつぽ。69は土師器の小皿。70・71はセットを成すと思われる中国製の口縁端反りの碗で、外面には鳳凰、内面には漢字が描かれる。全釉で高台畳付部には細かい砂粒が付着する。72は伊万里の皿でSD101と包含層から10個体以上出土した。内面の見込みと側面に菊花文が描かれている。口径に比して高台が小さく、やや碁笥底に近いものもある。高台畳付部周辺に微小な砂粒が付着する。呉須は鮮やかな群青色に発色したものと黒色に近いものがある。73は中国製の染付碗で10個体ほど出土した。内面には梅枝文が描かれ、外面は無文である。高台は小さくてやや内湾するものだが2点だけ幅約1cmの蛇の目高台をもつものがあり、梅の図柄も小振りで他と若干異なる。高台周辺に1～2mmのやや粗い砂が付着する。74も中国製の染付碗で見込部分が盛り上がるいわゆる饅頭心系の碗である。外面には花唐草文、見込には団花状の唐草文が描かれる。75は唐津の輪花皿で、SD101の掘方から出土した。口縁には段がつけられ4ヶ所で内側にひねられている。内面には鉄釉で水車と折枝が描かれ、口縁部周縁とくびれ部にも鉄釉が施される。釉は内面と外側面に施され、暗褐色を呈している。内底面には目跡はみられない。76は外面が黒漆で内面が朱塗りの木製碗で高台内側に刻印がみられる。

SG101・102 (77～84・85)

77は朱塗りの木製碗で高台内に「中下」と漆で書かれている。78は木製の碗で、底部に直径約2cmの円形の穴が穿孔されている。漏斗として使用されていたものと思われる。81は表面が暗灰色を呈する一見須恵器のような焼成堅緻な陶器で、外面は反時計回りのヘラ削りが施されている。口縁部には黄橙色の釉が部分的にかかり煤が付着する。82は京焼風の肥前系陶器。83は褐色の胎土をした灯明皿で、外面はヘラ削りされ回転糸切り底である。内面と口縁部に赤色顔料が塗られ、口縁には煤が付着する。84は京焼風の肥前系陶器で外底には判読不能の刻印が押され、高台畳付には砂が付着する。85は青磁の壺の体部で外面に淡青灰色の釉がかかる。

SK102・SE101 (86・87～88)

86は焼塩壺で体部外面に二重杵線に囲まれた「ミなと藤左衛門」の刻印がある。胎土には砂粒やクサリ礫が多く含まれる。87は京焼風の灯明皿。88は井の字形の道具瓦で片側の端部に穴が穿孔されている。

下面包含層（89～105・131）

89は美濃瀬戸の灰釉皿。淡灰緑色の釉が全面にかかる。90は志野の皿で、わずみ色の釉が全面にかかり、外底には砂目がみられる。91・92は口縁端反りの中国製白磁皿。93は中国製青磁碗で幅の広い蓮弁文が外面に彫られている。94はやや大型の肥前系陶器碗で内面には鉄釉で略化した図柄が描かれている。95は唐津の碗で腰部の屈曲は緩く高台が低い。釉は淡黄緑色である。96は高取の皿で内面と外面体部に暗褐色と黄灰色の釉がかかり微妙な色相を醸しだしている。内底には胎土目がみられる。97は丹波あるいは備前の太平鉢である。98～105は101の唐津の皿を除いてすべて中国製染付である。98は口縁がやや反端る碗で外面には花唐草文、内面口縁には四方禪文が描かれる。99は外面に唐草文、内底面に宝相華が描かれ、高台内底面には微小な砂粒が付着する。100は口縁が端反る小型の皿で器壁がやや厚くぼったりとしたつくりである。内面見込みに山水が描かれていて、高台畳付には微小な珪砂粒が付着する。呉須は淡青灰色に発色している。101は唐津の皿で口縁部に細かいひだをひねりだしている。内面には鉄絵が施されている。釉の色調は淡灰黄緑色である。102は体部外面に印刻卍つなぎ文をもつ型造りの碗で凹部には釉はかからない。内外面に龍が描かれる。同一個体と考えられる口縁部の内側には四方禪文がみられ外側には波濤文帯が廻っている。103は内面見込みに「壽」と書かれた皿で、口縁は端反りで高台畳付と内側には砂粒が付着する。104は口縁がやや内湾し内面に草花文、外面には如意雲が描かれた皿で、高台内側に×のヘラ記号のような痕がみられる。105は型造りで内面に印刻文がある稜花皿。見込みに菊枝文が描かれる。

S K 1001・1002・1003・1005（106～130・132・133・134）

106は外面にやや幅の広い蓮弁文をもつ青磁碗。107は口縁端反りの白磁皿であるが、釉の色は淡青緑色で青磁に似通る。108・109はセットを成すと考えられる小皿と中皿で内面見込みに蛟竜が描かれ外側に波文帯が廻る。小皿の外底には呉須で記号が書かれる。高台畳付部の砂粒は良く削り取られている。110は饅頭心型の碗で見込み部が盛り上がり、外面に花唐草文、内面に団花文がみられる。高台部には微小な珪砂がびっしりと付着する。111・112は同型式の口縁がやや内湾する皿で、見込み部の圏線内に人物が描かれ、口縁部には四方禪文が廻る。高台周辺にやや粗い砂粒が付着する。同型式で蛟竜が描かれた皿も数個体出土した。113・114は土師器の小皿。115～117は唐津の碗。低い高台を削り出し、116と117は腰部の屈曲が弱く器高も高い。115は丸みを帯びた腰で器高も低い。釉は115が灰オリーブ色、117が明黄緑色で、116は火中していて不明である。118は美濃瀬戸の天目茶碗。火中している。119は産地不明の茶碗。腰部で強く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。暗赤紫色の釉が全体にかかり口縁と内底には黄灰色の釉が上に斑状にかかる。黒漆で補修した痕跡が2ヶ所で認められる。120は備前の壺で口縁端部を外側に折り返し2段にして、肩部には沈線が2状廻る。また肩部には重ね焼きの痕跡がわずかに残り蓋とセットで焼成されたようである。121は産地不明の小型の摺鉢。須恵質で口縁内側から体部上半にかけて淡黄緑色の釉がかかる。内面には6条1単位のシャープな摺り目が刻まれている。122は丹波の壺。123は唐津の香炉。124は瓦質の火舎で外面上半には横方向に密なヘラ磨きが施される。125は丹波の摺鉢で、粗い摺目が内面と底に刻まれている。赤褐色で焼成堅緻である。126は備前の大甕の口縁部。127は備前の水屋甕。肩部がよく張り、体部中程に断面三角形の凸帯が一条廻りその上に環状の耳が2ヶ所に貼り付けられる。全体に暗褐色で口頸部外面には灰黄緑色の自然釉がかかる。128は

茶臼の下臼でやや目の細かい砂岩製である。129は砂岩製の一石五輪塔。梵字が正面に刻まれている。130は石臼の上臼。摺り合わせ面はかなり磨減している。131は下面の包含層から出土した板碑の先端部分である。斜め側面には判読不能の文字が刻まれ、上部の平坦面に長軸5 cm程の楕円形の窪みが彫られている。板碑から墓石か何かの台座に転用されたものであろう。132は中国製の染付の稜花皿で体部中程で外側に屈曲して段になっている。内面見込みには樹木と鹿と猪が、外側には草花と鳥が描かれる。呉須は淡いブルーで、高台とその内側にはやや粗い砂粒がびっしりと付着する。133は木製の高杯。一木造りで、皿部外面に一条の溝が廻る。134は中国製の染付皿で内面に花樹文、外面に如意雲がえがかれている。

第Ⅳ章 ま と め

前章までに、確認した遺構や遺物などについて報告してきたが、これらと古絵図の記録などから今回の発掘調査の成果を簡単にとりまとめてみたい。

『高野山古絵図集成』によると、17世紀中頃の正保3年(1647)^③および承応2年(1653)の絵図^④には調査区の西側は空地で東側には北から蓮光院、福生院が記されている。元禄6年(1669)の絵図^⑤では大半が空地で東側に来蔵院と真蔵院が記される。宝永3年(1706)の絵図^⑥には自性院が記され、文化8年(1811)^⑦から明治17年(1884)の間の絵図^⑧には自證院が記されている。このように調査区には17世紀中頃から後半には蓮光院と福生院の敷地の西部がかかり、元禄年間の頃は空地で、宝永年間以降自性院が建立され、文化年間には自證院の敷地となっていたことが古絵図から窺える。今回の調査では、建造物の基礎工事で遺構がかなり破壊されており、調査面積も限られていたため上記の寺院に比定できるような遺構は残念ながらごく一部しか確認できなかった。次に上面遺構から各時代順に遺構と遺物についてまとめてみたい。

上面では東西5間の建物S B01の南端部を確認した。北西端と南側で石敷炉S X01とS X02を検出した。石敷の上の炭灰層から伊万里などの多数の陶磁器が出土した。溝S D03は北東から南西に流れる排水用の暗渠溝である。上面遺構の時期は18世紀末から20世紀初頭と思われる。

中面では南北7間で約40尺を計る大型の建物S B101の西端と東西南北2間×2間の礎石をもつ小さな建物S B102を確認した。S B101は位置関係と時期から17世紀中頃に存在した福生院の建物跡ではないかと考えられる。井戸S E101とS X101は一連の水利施設だと思われる。井戸から水を汲み上げて、竹の導水管と木製の継手の中を流して高野槇を刳抜いた水槽に水を溜めていたものと推測される。S D101は胴木の上に石を並べた敷地を区画する溝だと思われる。伊万里の皿と中国製の碗が多数供伴して出土しており両者の編年を考える上で1つの資料となるだろう。中面の包含層からは承応3年から延宝7年(1654～1679)にかけて作られた塩焼壺、土坑S K102からは承応3年(1654)以前に作られた塩焼壺^⑨が出土している。両者とも外面に刻印されており泉州湊村で生産されたものである。中面遺構は17世紀中頃から後半にかけての時期だと考えられる。

下面では柱穴は検出したが明瞭な建物跡は確認できなかった。調査区南部で竹の節を刳抜いて駒と呼ばれる継手でジョイントして埋設した水利施設を数条検出した。東から西へと水を流す上水道施設と考

えられる。井戸S E 1001と溝S D 1005・1006も一連のもので、井戸の水を水圧を利用して溝に埋めた竹筒の中を流して遠方へ送水していたと考えられる。備前の大甕と水屋甕が井戸と土坑S K 1001から出土しておりそれらも井戸の周囲で同時に使用されたと思われる。土坑S K 1001は南北6.5mを計るハート形の巨大なもので上層から中層までは火災のため生じたと思われる焼土や炭混じりの黒褐色砂礫土が堆積していた。この中から備前・唐津・丹波・美濃瀬戸などの国産陶器と土師器、中国製の青磁・白磁・染付が多数出土した。時期は17世紀初頭で、和歌山県下では中近世の土器は豊臣秀吉が紀伊へ進攻して根来寺や粉川寺などを焼亡させた天正13年（1585）から17世紀にかけては出土例が少なく、今回の土坑や包含層の一括資料は国産陶器と中国製磁器の編年を考えるうえで良好な資料となろう。

参考文献

- ① 宮坂有勝・佐藤任 『新版高野山史』 昭和59年
- ② 日野西真定編・著 『高野山古絵図集成』 昭和58年
- ③ 安藤精一・五来重監修 『和歌山県の地名』 昭和58年
- ④ 安藤精一編集 『図説和歌山県の歴史』 昭和63年
- ⑤ 日本貿易陶磁研究会 『貿易陶磁研究』 No. 1～8 1981～1988
- ⑥ 和歌山県教育委員会 『昭和55年～平成元年度 根来寺坊院跡』 1980～1989
- ⑦ 和歌山県文化財センター 『根来寺坊院跡―岩出町立歴史民俗資料館建設に伴う発掘調査―』 昭和63年
- ⑧ 大阪市文化財協会 『大坂城跡Ⅲ』 昭和63年
- ⑨ 岡山県立博物館 『日本の古窯』 昭和61年
- ⑩ 平凡社 『古伊万里』 別冊太陽63号 昭和63年

註

- ① 大橋康二 「鍋島藩窯跡物原出土の京焼風陶器」（上）（中）（下）『セラミック九州』 No. 7～9 佐賀県立九州陶磁文化館 昭和58～59年
- ② 渡辺誠 「物資の流れ―江戸の焼塩壺―」『季刊考古学第13号 江戸時代を掘る』 昭和61年
- ③ 『高野全山図（御公儀上一山図）』 正保3年 参考文献②に所収
- ④ 『高野全山絵図（高野山絵図）』 承応2年 参考文献②に所収
- ⑤ 『高野全山絵図（高野山壇上并寺中絵図）』 元禄6年 参考文献②に所収
- ⑥ 『壇上及び各谷寺院の絵図（高野山壇上寺家絵図）』 宝永3年 参考文献②に所収
- ⑦ 『高野全山及び周辺の絵図』 文化8年 参考文献②に所収
- ⑧ 『高野全山及び周辺の絵図（高野山一覽全図）』 明治17年 参考文献②に所収
- ⑨ 註②に同じ

表土・攪乱

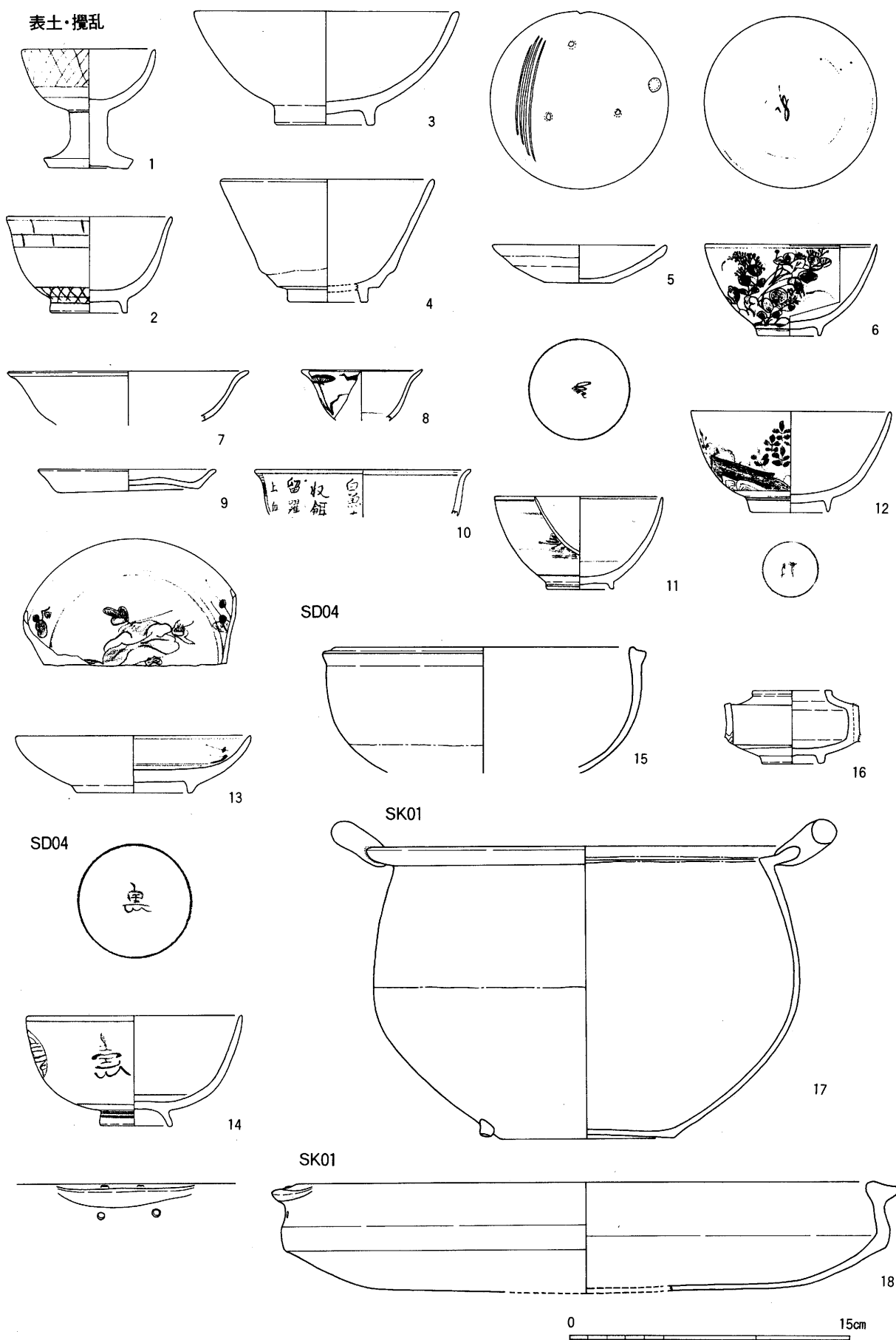
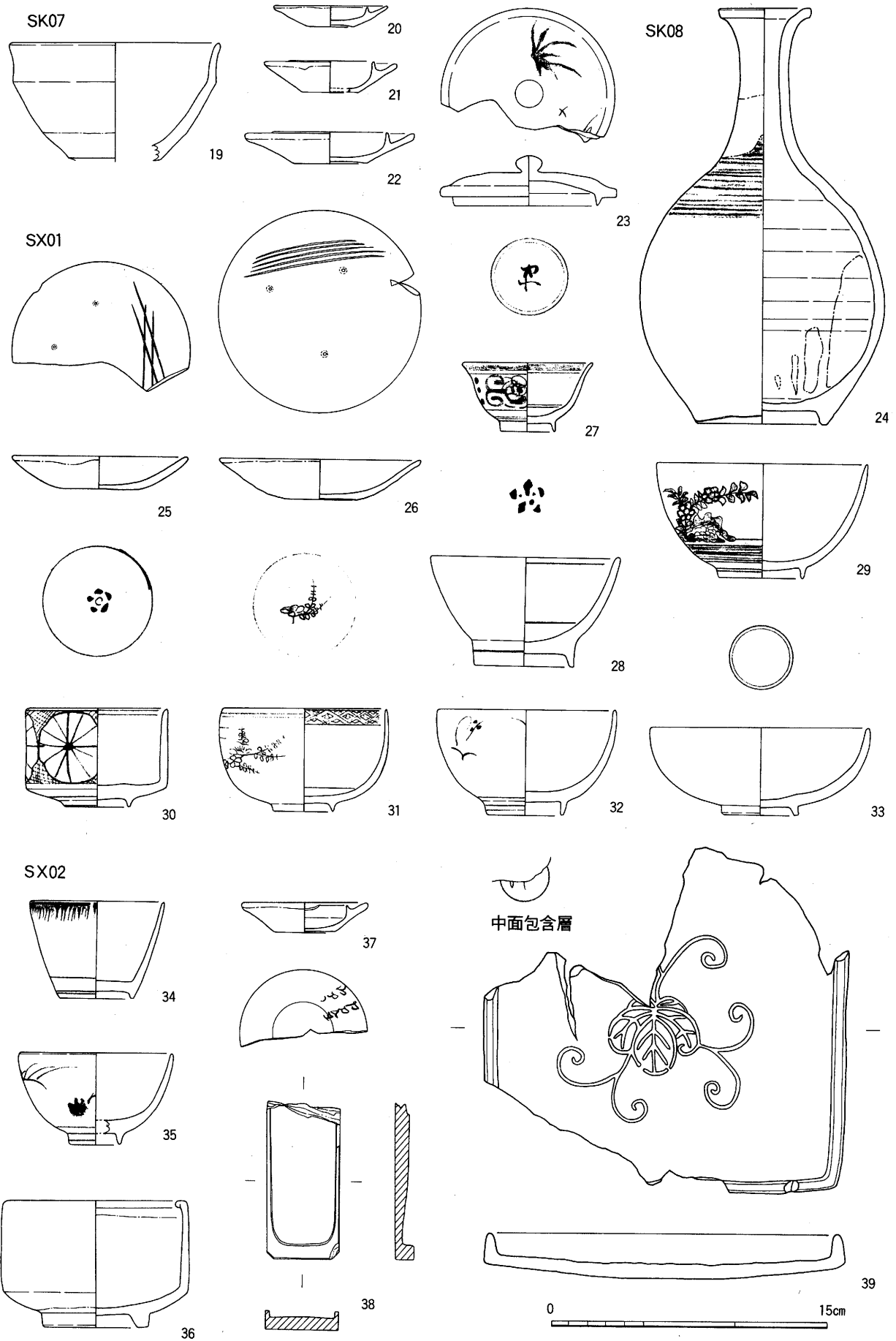
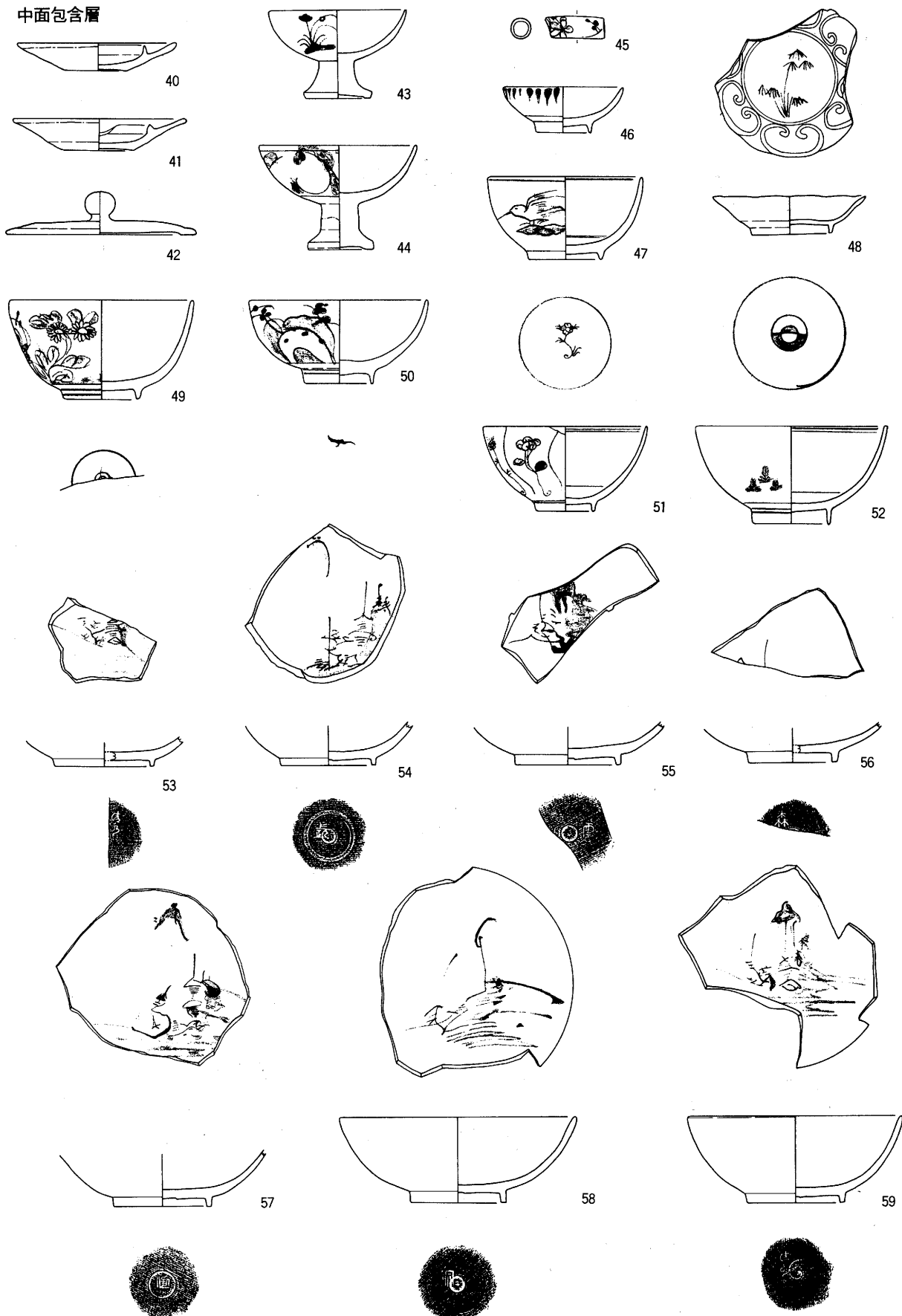


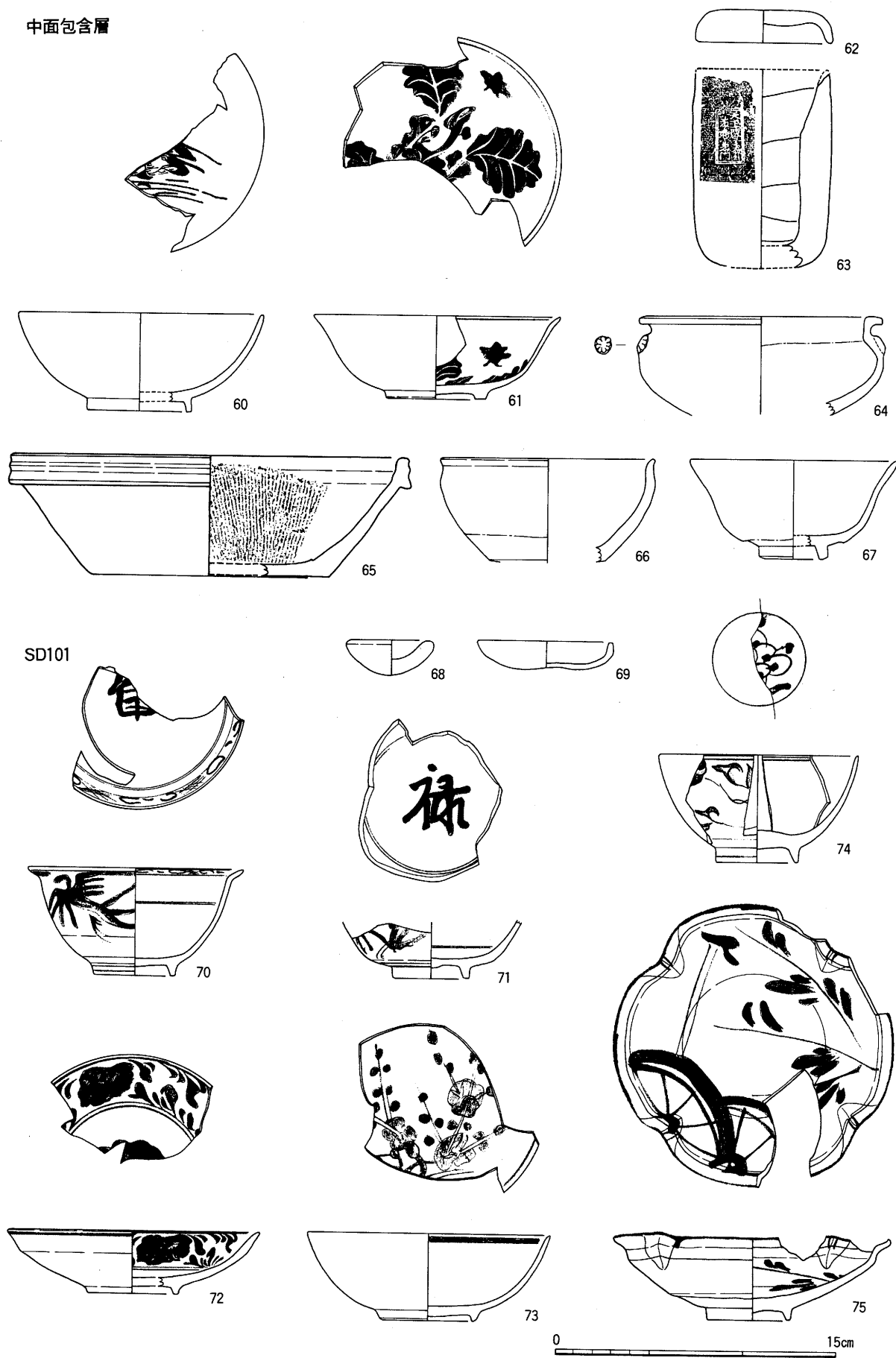
图 2



中面包含層



中面包含層



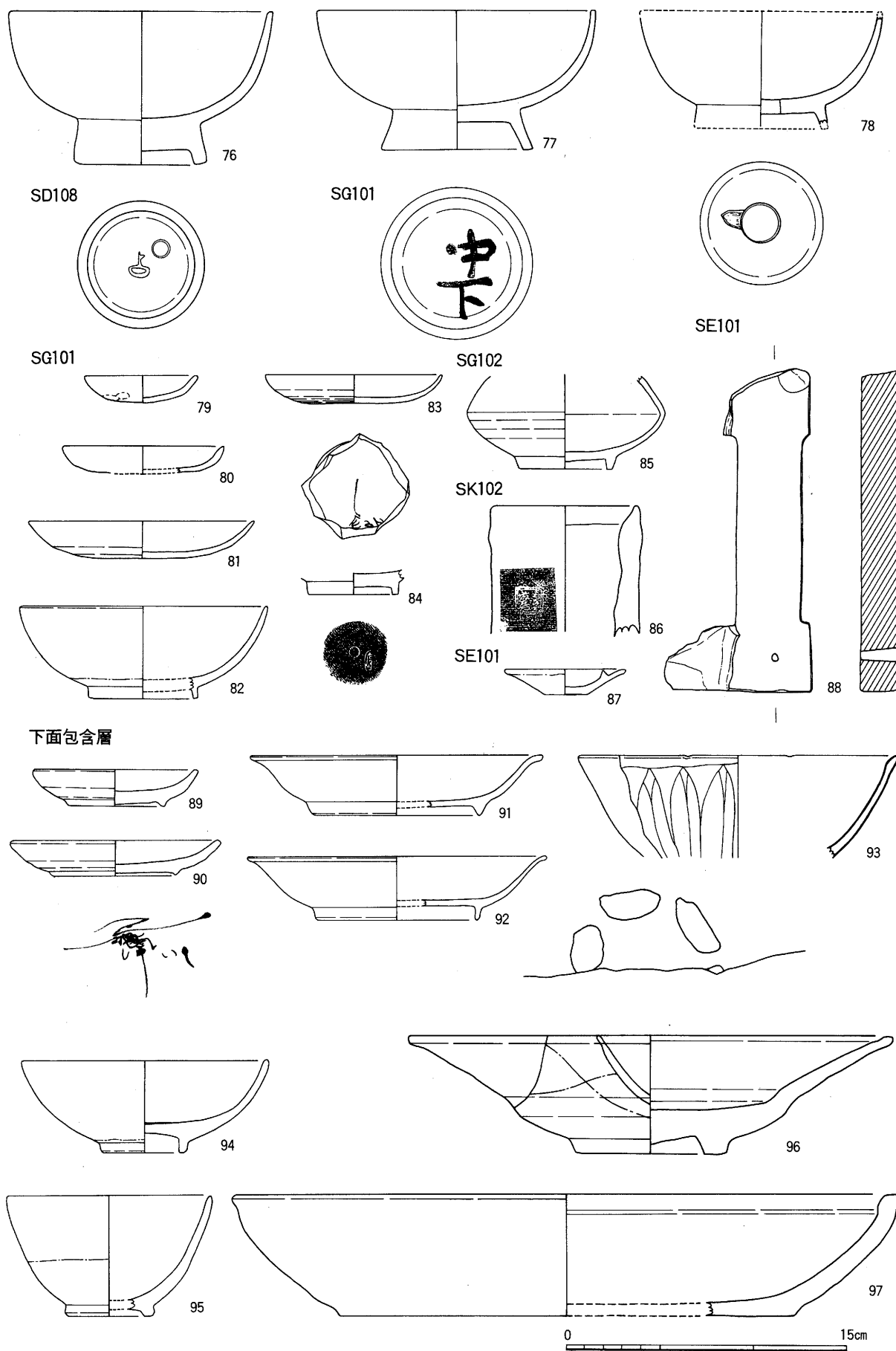
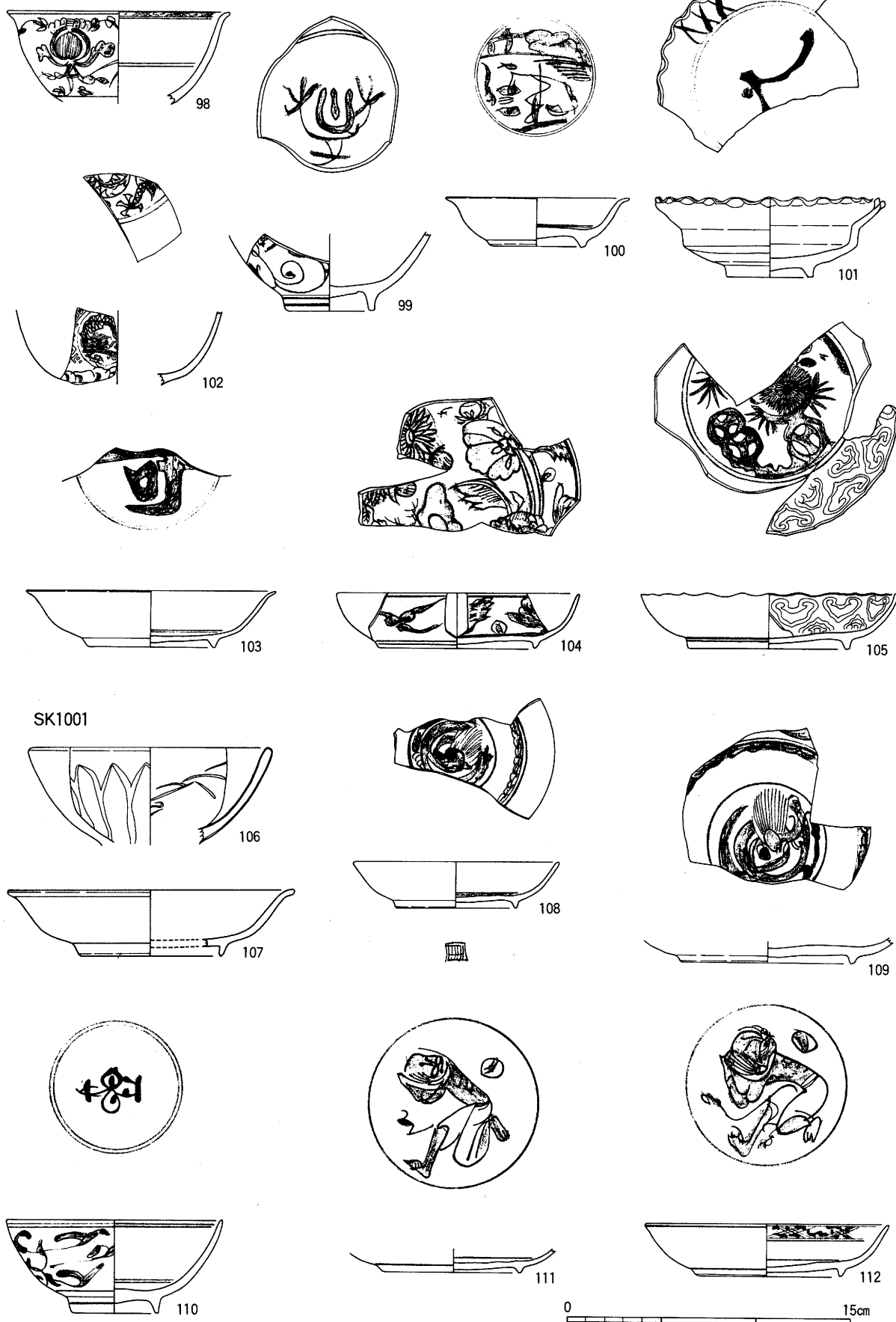
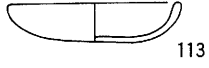


图 6

下面包含層



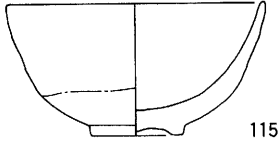
SK1001



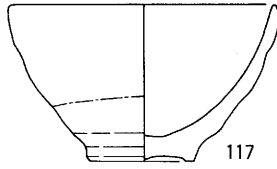
113



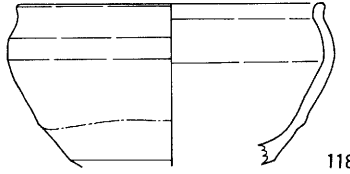
114



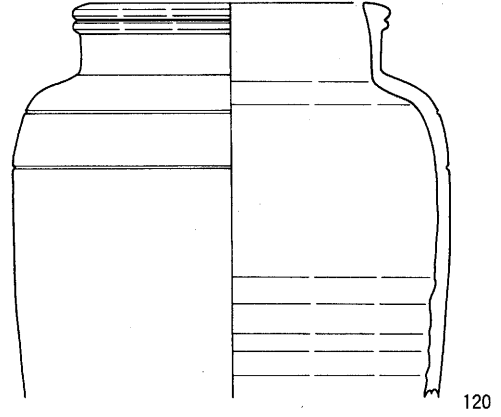
115



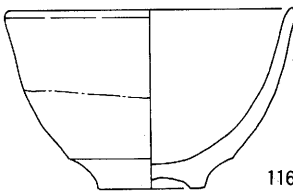
117



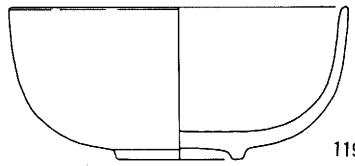
118



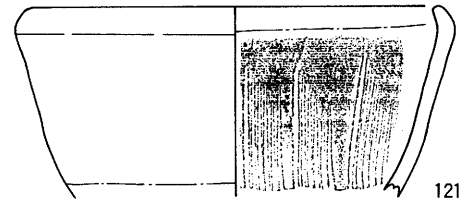
120



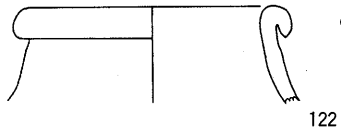
116



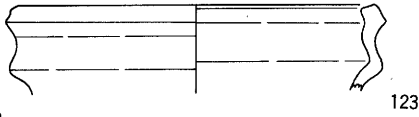
119



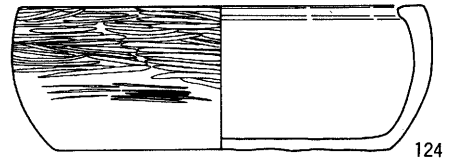
121



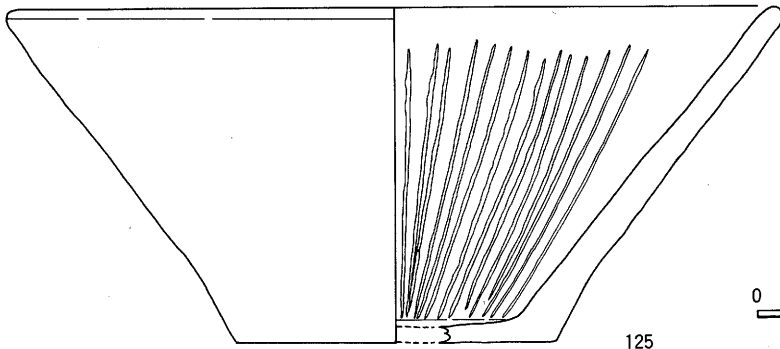
122



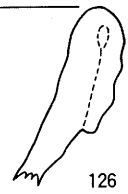
123



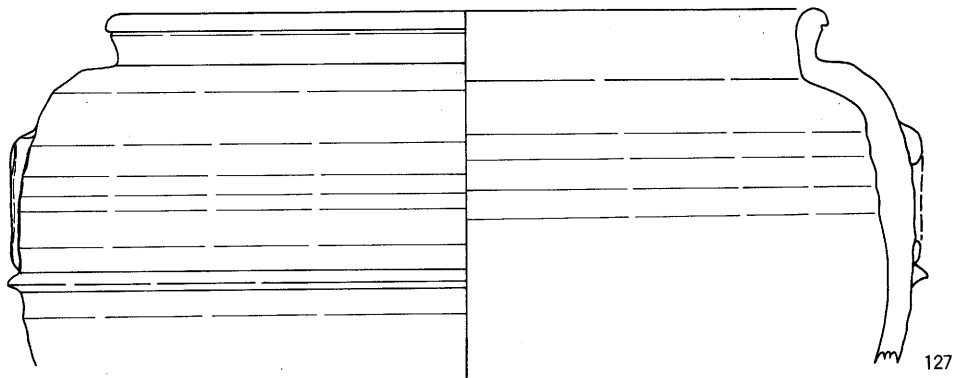
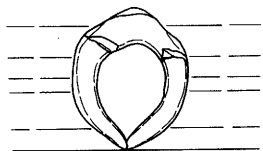
124



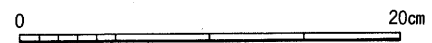
125



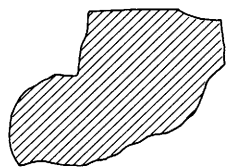
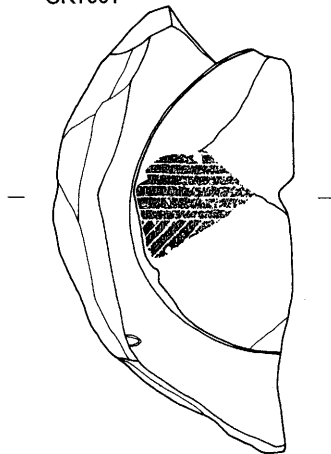
126



127

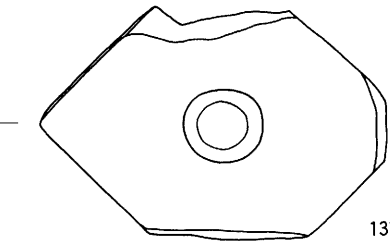


SK1001

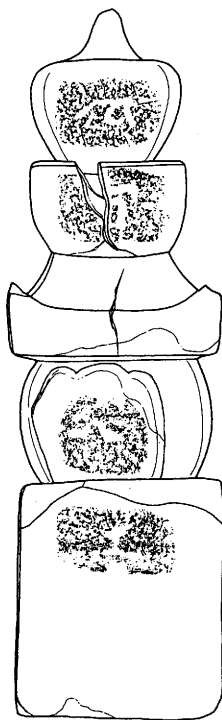
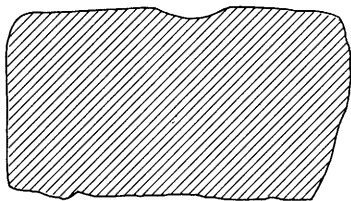


128

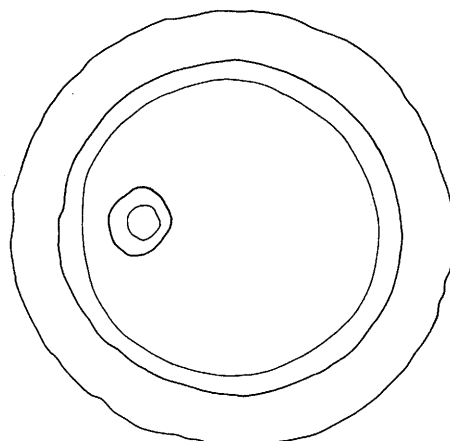
下面包含層



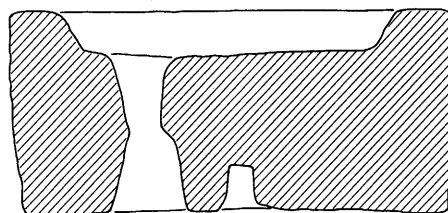
131



129



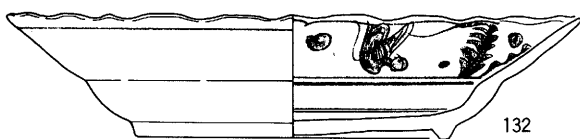
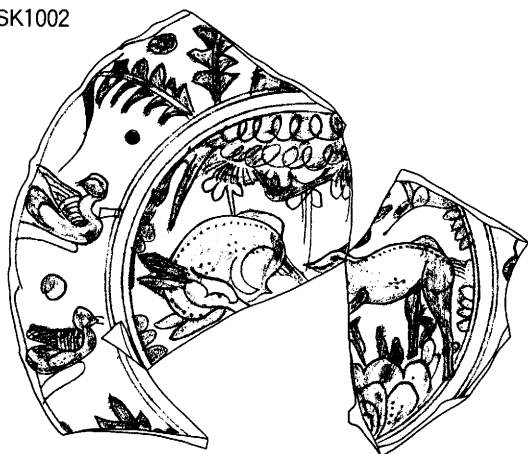
1



130

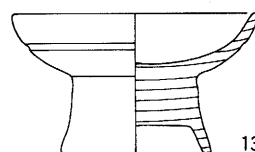


SK1002



132

SK1003



133

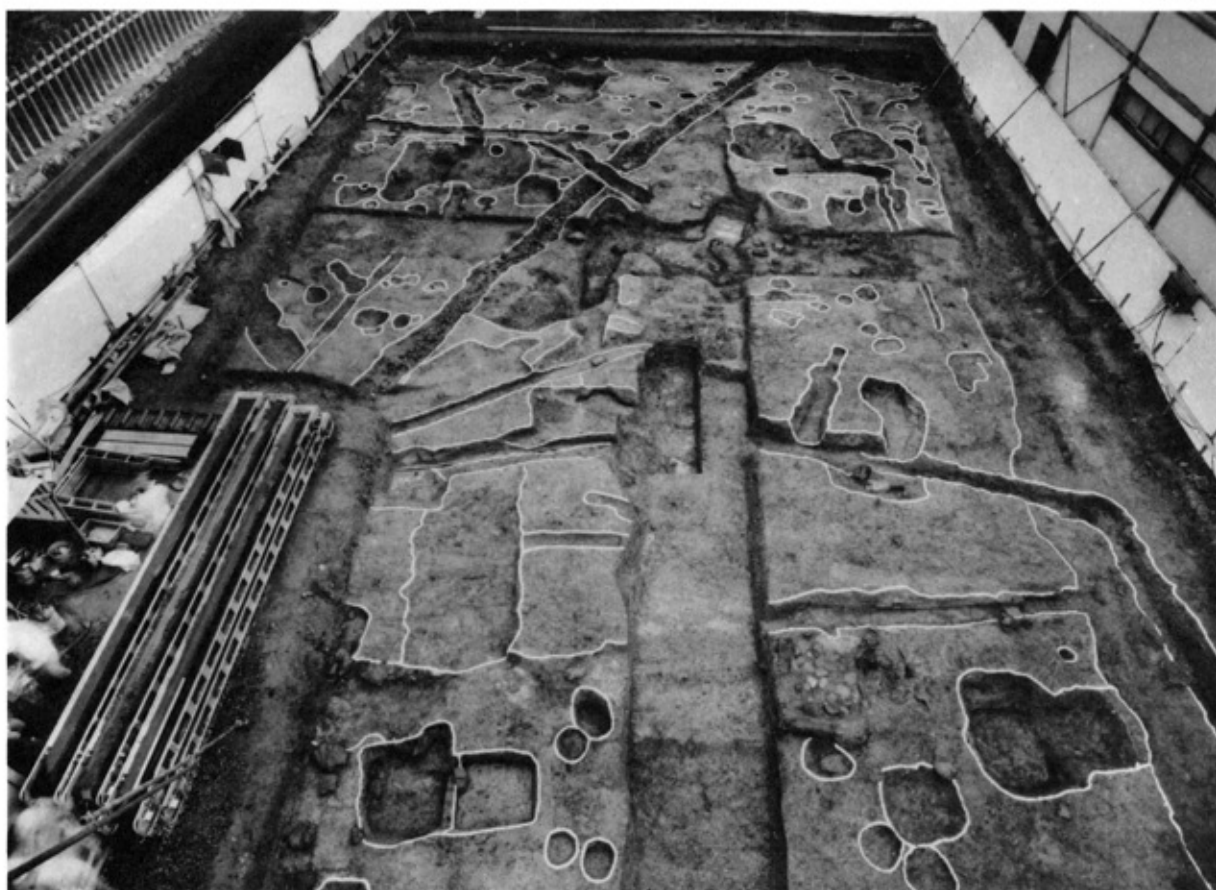
SK1005



134



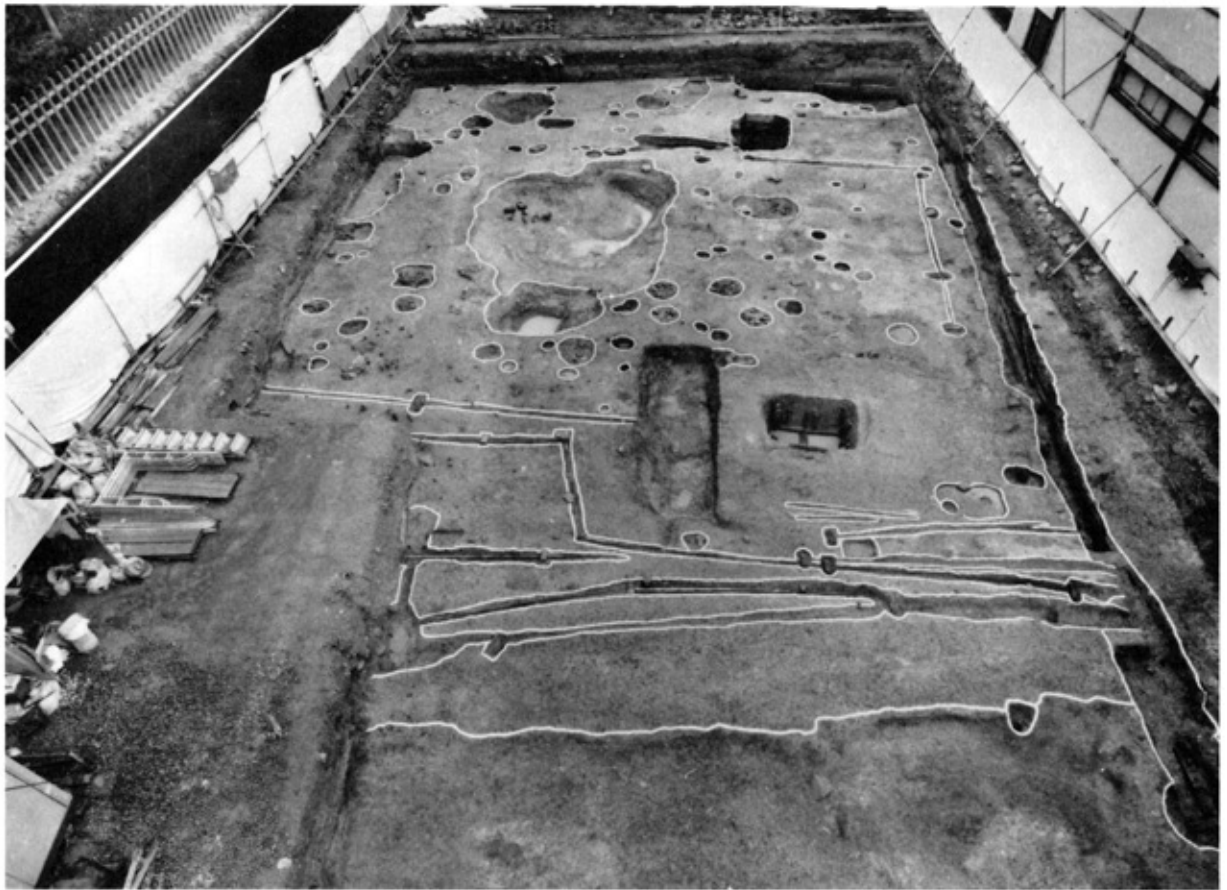
圖 版



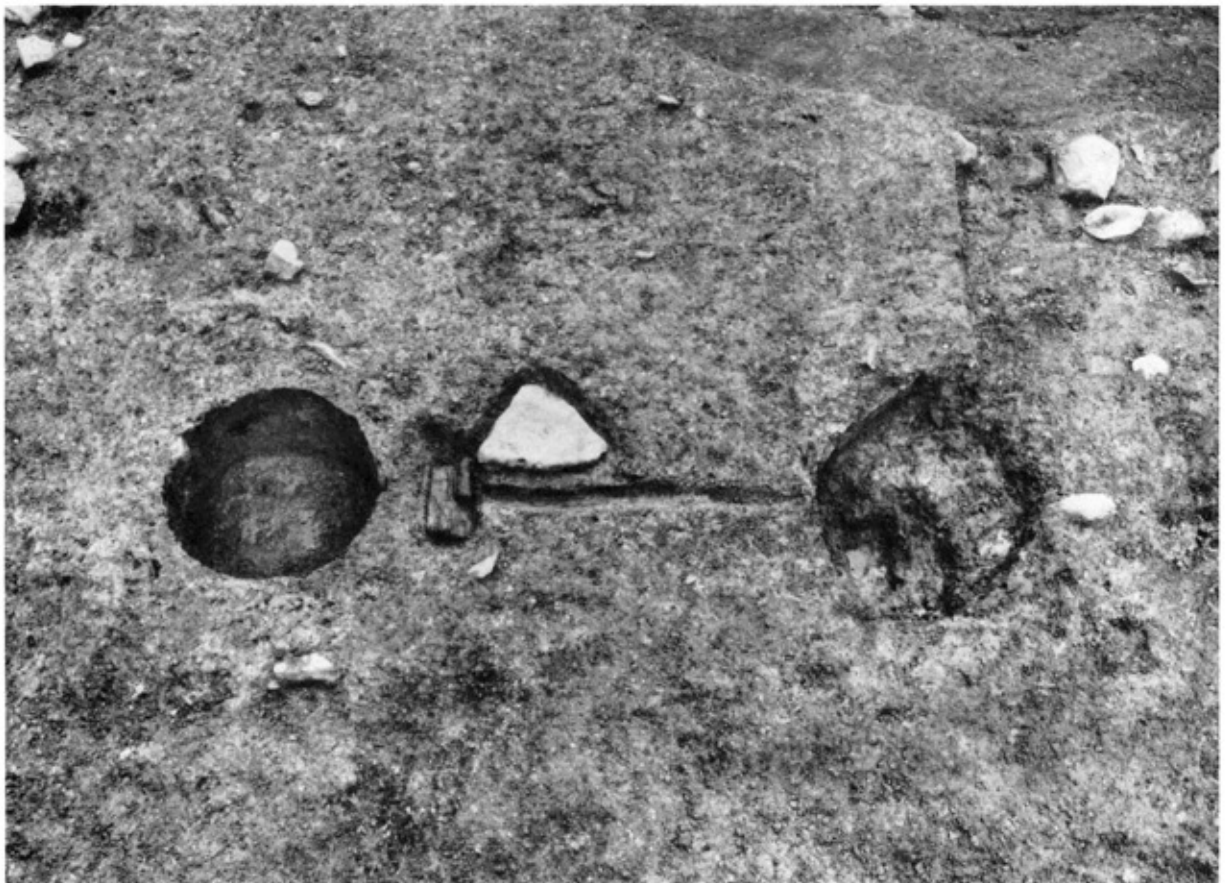
1 上面遺構全景（南から）



2 中面遺構全景（南から）



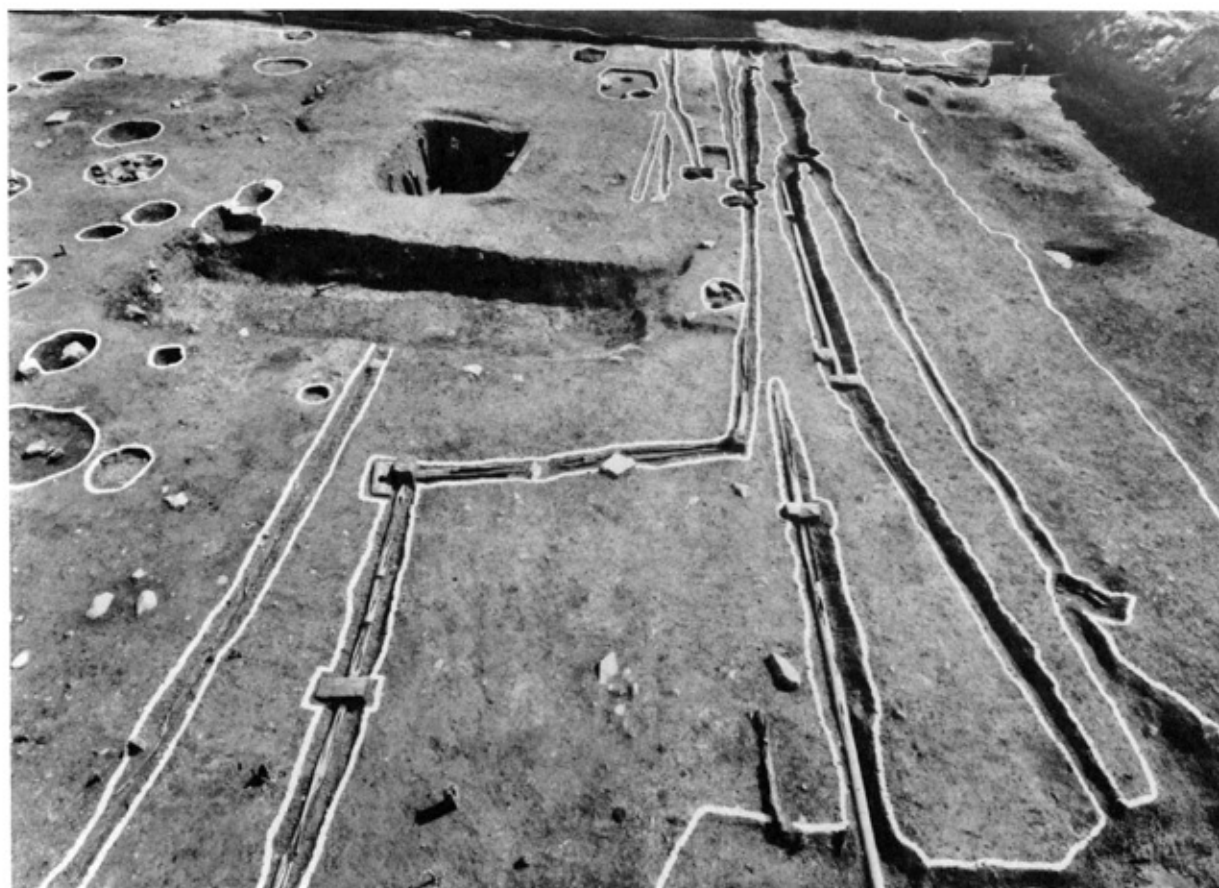
1 下面遺構全景（南から）



2 S X101（北から）



1 SE1001 (西から)



2 SD1001・1002・1003・1004 (西から)



1 上面包含層遺物出土状況



4 S G102遺物出土状況



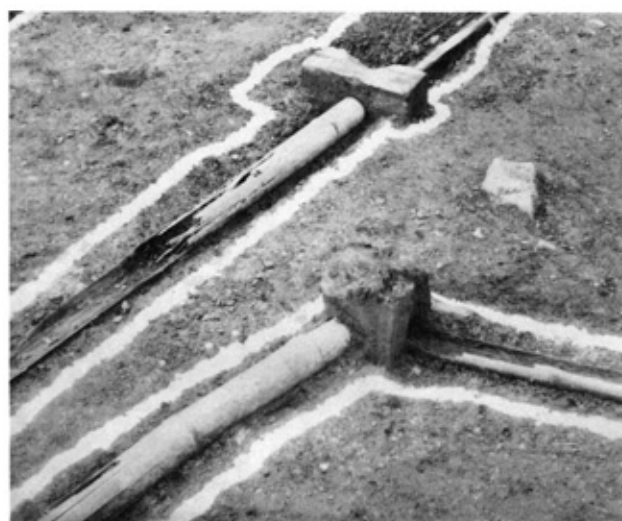
2 S X02 (北から)



5 S E101 (北から)



3 S D101 (南から)



6 S D1002・1003継手部 (北東から)



1



2



4



5



7



8



10



6



12



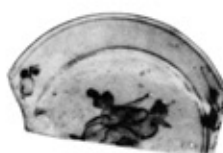
16



11



17



13



14



18



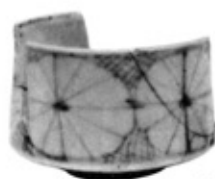
19



24



29



30



31



27



34



35



28



32



37



38



39

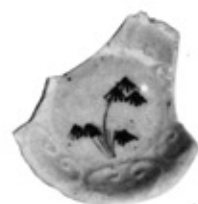


44

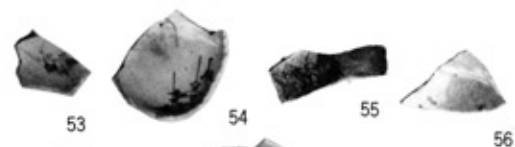
43



46



48

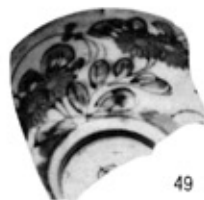


53

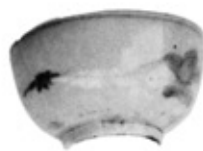
54

55

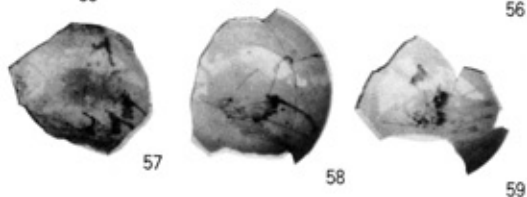
56



49



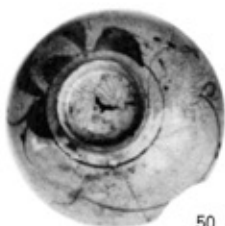
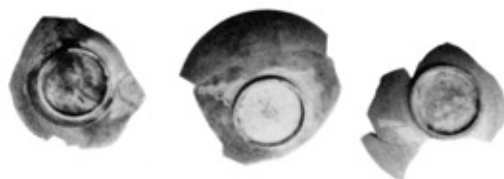
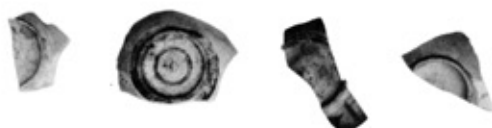
47



57

58

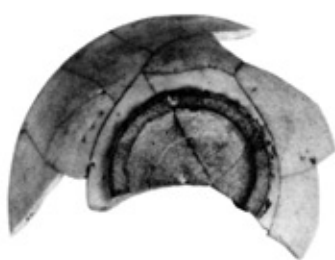
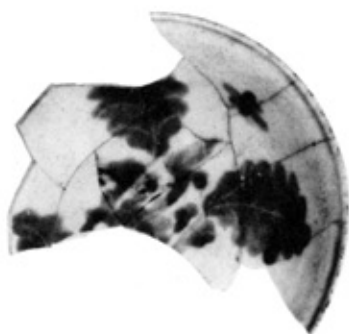
59



50



51



61



62



63



66



67



64



70



71



68



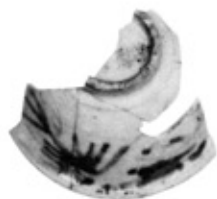
69



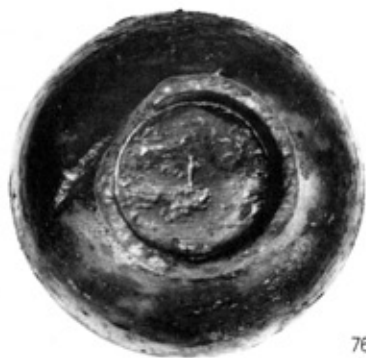
72



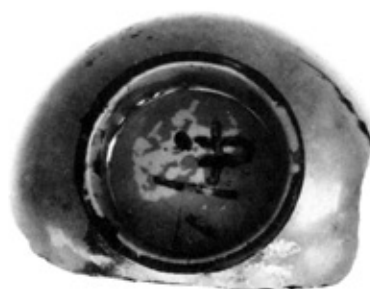
73



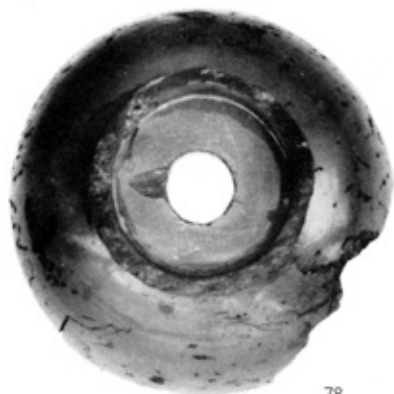
75



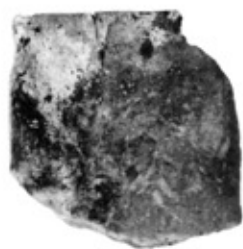
76



77



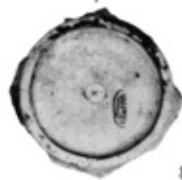
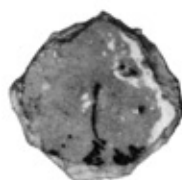
78



86



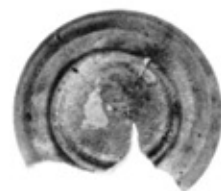
94



84



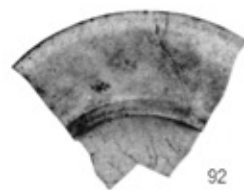
88



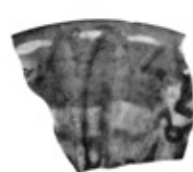
89



90



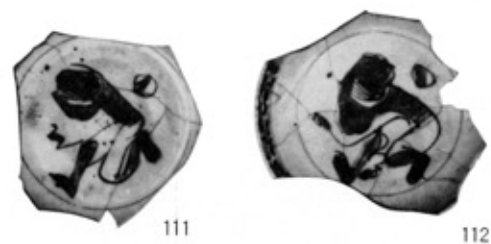
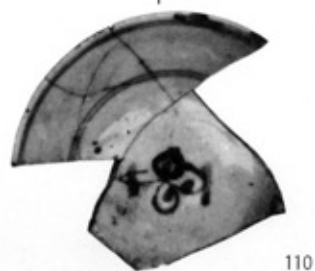
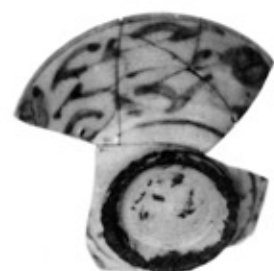
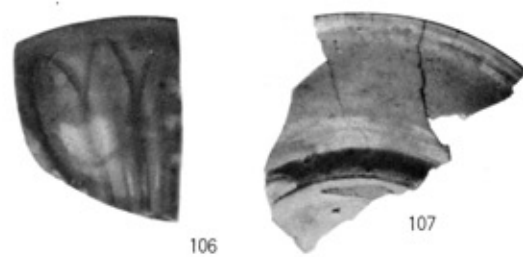
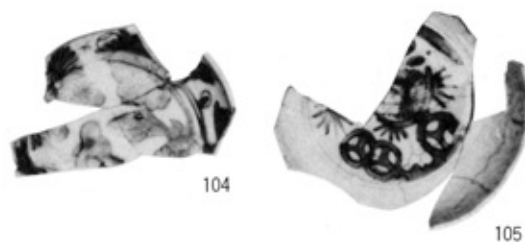
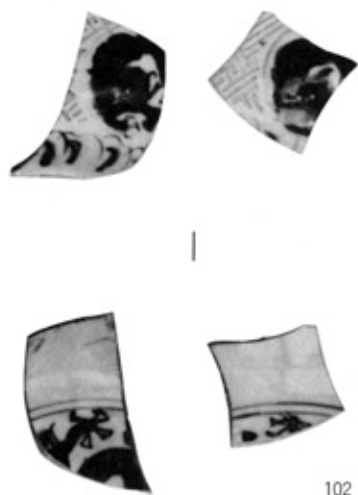
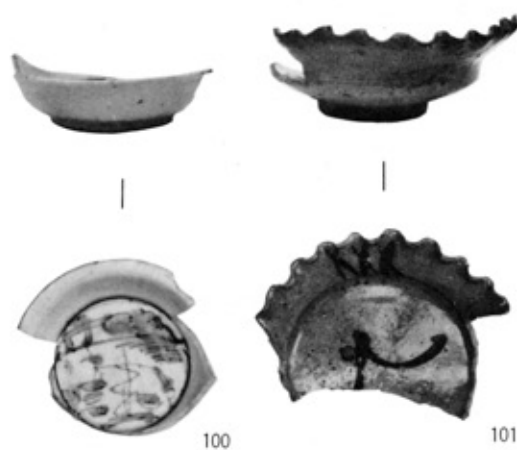
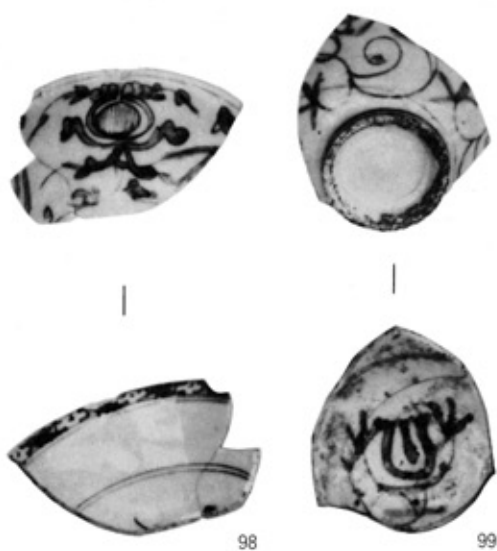
92



93



96





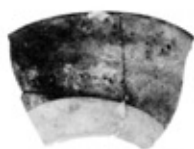
115



117



116



118



120



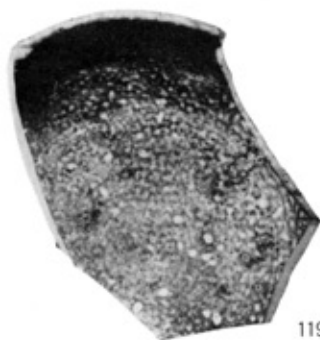
1



121



124



119



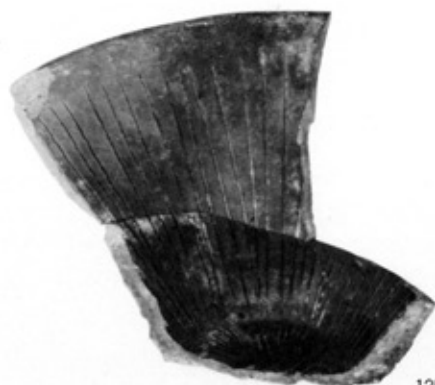
122



123



127



125



128



129



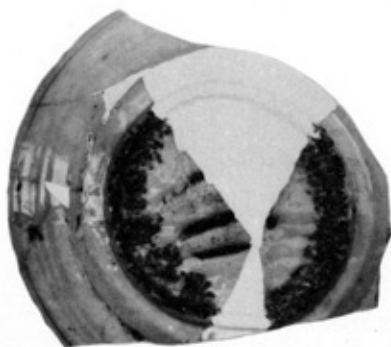
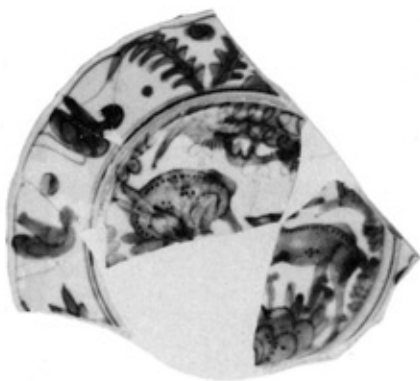
130



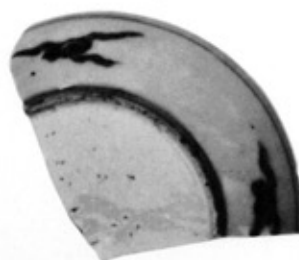
131



133



132



134

金 剛 峯 寺 遺 跡

——南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査——

1990年3月発行

編集
発行

財団法人和歌山県文化財センター

印刷

有限会社 真 陽 社
